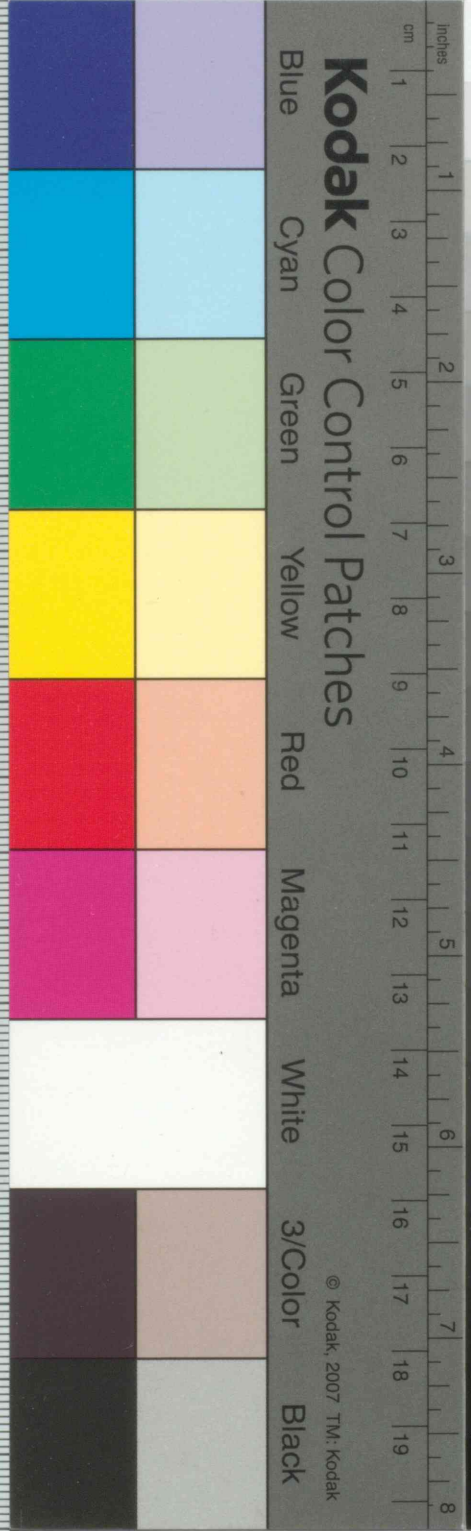


訂五
新
日本
讀本
吉澤長
別編
十



375.9
Y019
資料室



Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

41443

教科書文庫

4
810
41-1934
2000301706

1940



資料室

375.9
4019

昭和九年十一月二十六日
中學校國語漢文科・實業學校國語科用

文部省檢定濟

訂五

新

日
本

讀

本

修文館發行



日本文



本居宣長像 (第七課參照)

廣島大學圖書印

広島大学
教
34992
圖書

編纂趣意要項

國語教育の目的はまづ國語を正しく且つ完全に把握せしめ、次いで國語によつて表現された國民精神と國民文化とを徹底的に理解せしめるにあると信じます。

この目的を達成する爲に

- 一 現代の生命のさながらに動いてゐる現代文の精神を確實に味得せしめたい。
- 二 現代まで流れて來た源泉に棹さして前代文の精神を完全に理解せしめたい。
- 三 かくて國民精神を反射してゐる國語の運用に徹底せしめ、

世界の面前に於てそれを磨きあげる基礎を造りたい、
 以上三旗幟を目標となし、古今の代表作家の名篇について採訪
 厳選し、それを適宜に鹽梅排列しました。
 かくて國語愛から國家愛への道程を残す所なく、
 學校に於ける國語教育の完成に貢獻したいと祈つて止まないの
 であります。

昭和九年七月

編者 識

卷 十 目 次

一	將來の日本	鹿子木員信	一
二	秋の力	網島梁川	九
三	永遠の生命	互理章三郎	三
○四	國語の變遷	編者	元
五	雅文抄		
	・一 知足庵の記	(琴後集)	元
	・二 旅泊	(樞園文集)	元
	・三 家路	(岡部日記)	三

六 俳文抄

一 落柿舎の記 去 來 三

二 蓑蟲記 素 堂 三

三 百蟲譜 横井也有 三

七 雪のあした友の許に 本居宜長 四

八 徒然草抄 吉田兼好 三

一 顔回 三

二 ものに争はず 三

三 筆をとれば物書かれ 三

四 一道にたづさはる人 三

五 人のものを問ひたるに 三

九 新島守 (増鏡) 三

・一〇 日本文學研究の新意義 藤村作 五

一一 法成寺の造營 (榮華物語) 七

一二 須磨の秋風 (源氏物語) 五

十三 源氏物語

一三 謠ひもの 三

一 朗詠 三

二 今様 三

一四 萬葉集序説 佐佐木信綱 六

一五 畝傍の山 (諸家) 三

一六 倭建命 (古事記) 六

一七 生活の中心 阿部次郎 三

目次

一八 社會的意識と國家	西田幾多郎	二〇
一九 日本民族の大使命	田中寛一	二七

附錄

上古・中古文學

編者 三〇

注意

□ 此、秋字に記憶スベキ語(漢字書取)

九卷	21	4	7	8	10	11	14	18	20	1	9	15	12
----	----	---	---	---	----	----	----	----	----	---	---	----	----

目次 終



鹿子木員信
熊本縣の人、文學博
士、哲學者、九州帝
國大學教授。

租借地

訂五 新日本讀本 卷十

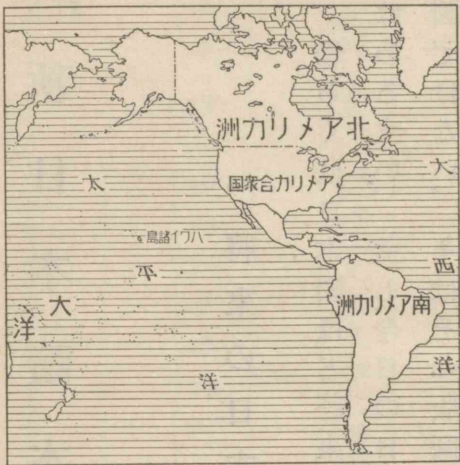
一 將來の日本

鹿子木員信

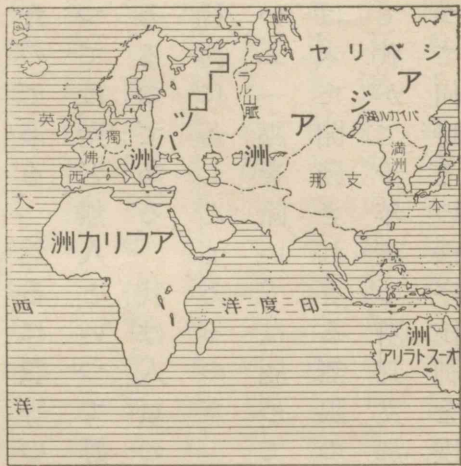
恐らくは日本國ほど將來の偉大を約束された國は、他に多く
 はあるまい。蓋し、今日の日本は、もはや單なる島國、純粹なる海
 國ではない。それはその版圖たる朝鮮とその租借地たる關東州
 とによつて、大陸的國家となつたからである。しかも我等の活
 躍の奥に擴るその大陸は、世界最大の歐亞大陸だ。それは亞細亞
 大陸ばかりではない。實にシベリヤを経て歐羅巴大陸に續く
 大陸である。鐵路フランスのバリーよりバイカル湖畔に至る
 まで、殆どトンネル一つなき連續の平野である。ウラルの山脈

は、唯少しく持上つた丘陵に過ぎない。バイカル湖畔に至つて、始めてその岬角を迂曲するために、僅ばかりのトンネルを潜るのみだ。而してバイカル湖を後ろにし、興安嶺の低い、なだらかな丘陵を過ぐれば、再び朝鮮國境近くまで打續く平々坦々の南北滿洲の沃野である。

この世界最大の大陸である歐亞大陸に連なる日本帝國の中央部であり、又その核心である日本諸島の面するところは、實に世界に於ける最大の海洋である太平洋だ。而して太平洋の彼岸は、即ち南北アメリカ大陸だ。換言すれば、日本帝國は、實に、以て一般に



ラツチェル
獨逸の地理學者、西
曆一九〇四年歿、年六十。



き偉業と、雄渾なる文化とがなしとするならば、それは日本國土の罪でなく、無論、日本國土を我等に賜うた神々の責任でもなく、明らかに我が日本國民の懦弱低能の然らしむるところでなければならぬ。

拮抗

若し、世界において、日本國以外に、日本に近き形勝の地位を占むる國ありとすれば、それは英國であらう。しかもその英國は、昔よりその對岸に、スペイン・フランス・ベルギー・オランダ・ドイツ・デンマーク等、その人口において、その富と文化の程度とにおいて、何れも英國と雁行し拮抗するところの強國文化國を控へてゐたのである。然るに我等の日本國の場合においては、西北に向つては、殆ど無人といつて好いシベリヤの曠野が、無限に開けてゐるのである。我は人口の過剩に悩んでゐるのに、彼は人口の稀薄に苦しんでゐるのだ。しかもその地は、たゞ嚴冬のはやくそく西寒といふ一點を除いては、極めて良き健康地帯であり、その地上地下は、未だ開發されざる無限の資源を藏してゐるのである。而して我が二千年來の隣邦支那の現狀は、全然動搖崩壞の有様にあつて、何時その秩序統制を恢復し得べきかとも見えぬ。退いて

互寒

退嬰自屈
苟安

深くこれ等の事實を綜合し、玩味して見よ。鋭き靈覺ある者は、日本國將來の雄渾なる可能性が彷彿としてその心眼の前に湧き立ち來るのを禁じ得ないであらう。

然るに、翻つて思ふに、世界史上における日本の可能性は、これ取りも直さず、我等日本國民に課せられたる天與の課題、實に我等當面の天與の事業に外ならぬ。従つて、進んでこの天與の課題の解決に努めんとせず、却つて躊躇逡巡、退嬰自屈、たゞ目前の苟安を求むるにのみ汲々たることは、日本國民自らその日本國民たるの意義と使命とを拋棄し、自らをやがては來る亡滅の手にゆだねるものである。然らば生き且勝たんがためには、我等は何を爲すべきか。我等の仕事は、その事業の大であればあるほど、多岐多様萬端であることはいふまでもない。たゞ若し、この際我等の心構への根本的なるべきものを取出して語るを許

さるるならば、それは恐らく次の如くであらう。
 精神的には、我等は先づ、空疎皮相淺薄なる歐米追隨の風を止めねばならぬ。寧ろ去つて、深く日本精神の歴史的經驗に沈潛し、そこに我等の心を、我等自らの過ぎし勝利し文化によつて培ひはぐくみ、養ひ育てて、具體的に、即ち眞實に世界文化なるものに眼ざめなければならぬ。一度、我等の心にして、日本文化に培はれて、世界文化なるものに參到する時、我等の心は、もはや世界文化を自覺せる心である。而して一度眞に世界文化を自覺せる心を以て、歐米の文化に對する時、歐米の文化は、今までとは全然異なつた深き内容を持つ崇高なる姿となつて、我等の前に現れ來るであらう。その時歐米の文化は、もはや單なる機械的物質的文明ではなく、その機械的なるものさへも、實は、ある獨特な深遠な心構への生むところであることを知るであらう。而し

小楠

名は横井時存、小楠はその號、熊本縣の人、維新の功臣、明治二年歿、年六十、後塵を拜す

てこの時始めて、實はこの「西洋機械之術」をも「盡くす」ことが出来るのである。小楠流に、單に堯舜孔子之道を「明らかに」してゐただけでは、百年の學習もなほよく機械之術を盡くすことを得ないで、常に西洋の足跡を追ふのみでなく、遂にはその後塵を拜するに終始するであらうと思はれる。歐米の文化を物心兩面に互つて把握し得る者は、たゞ全體としての文化に沈潛參到する者のみである。而して、歐米文化との接觸交渉の今日の如く盛んなる日本にあつて、進むべき道は唯一つ、徹底的に而して全體として、歐米の文化を了得するにある。この了得の上に、彼我文化のより高き綜合に向つて精進することにある。而して經濟的、政治的には、前に指摘した如き當面の事々の大膽なる直視と、その事實を孕む課題に對しての勇敢なる解決の努力こそ、我等の指針たるべきものである。年々五十萬乃至七

十萬の人口増加は退嬰無爲を事とする人々に取つては、或は極めて厄介なる事實であるかも知れぬ。しかも我等はこの事實より面を背くべきでない。寧ろ生存の必要に直面して、内には國民的生活様式を改善することによつて、これを單純簡易堅固なるものたらしめ、外には國家發展の鐵則を明視して、その認識の上に、適確なる事實に基づき、細心大膽なる國策を樹立すべきである。今日世に行はるる思想は、我等の見るところを以てすれば、悉く一日の苟安を貪るなまけ者の欲求か、然らざれば、たゞ空しき俗論時流に投じて、事實客觀の問題のいづこに存するかを知らぬ空疎なる事大主義者の空論としか見えぬ。我等は一日も早く、この風潮を一掃して、再び我が日本國をして認識適確、勤勞健闘の國家たらしめねばならぬ。

(やまとこころと獨逸魂)

小專ヲ捲
大要ヲ入レ

網島梁川

名は榮一郎、倫理學者、明治四十年歿、年三十五。

偃蹇

いづれか...事實
たらざる

蕪村

本名は谷口寅、徳川時代の畫家、俳人、天明三年(一八二二)歿、年六十八。

二 秋 の 力

網 島 梁 川

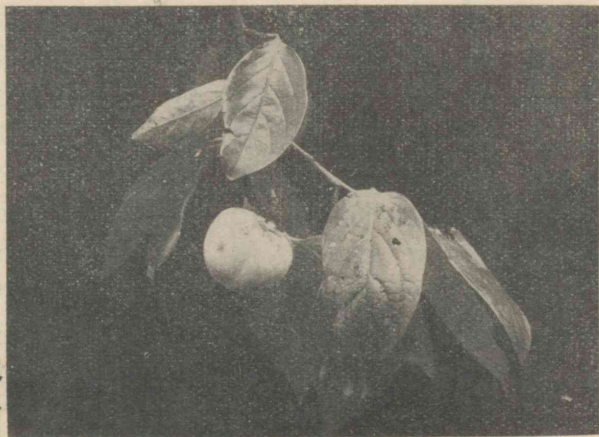
「あれこれを集めて霞む春の朧を、人生の夢とも見れば、秋はたゞちにこれ覺醒なり、事實なり。」
鳥紅葉の中より露れ出づる節くれだちたる樹身、枯芝生の底より躍り出づる偃蹇たる雲根、いづれか秋は人に迫るの事實たらざる。中にも秋の力を最も強く瞻かに言ひ出づるものは、黄柚なり、赤柿なり。一美術家語りて言はく、われ曾てひねもす秋を郊外に探りて秋に會はず、歸路會、夕空鮮やかに結び出でたる赤柿の果々たるを見て、始めて秋ここにありと叫びきと。げにも、秋の姿をさながらに具象にして描き出だせるものあれば、それは碧落の空に躍如として結び出でたる赤柿を描きてはまたとあらじ。秋は實に個の果々の赤柿、その全幅の表現を得たる趣あるにあらざや。そのむかし、蕪村

抱一

姓は酒井、播磨國(兵庫縣)の人、畫家、文政十一年(西曆一八二八)年六十八、
淋瀝揮灑

抱一の畫は、
あまのり、
あまのり、
あまのり、

天籟・地籟
碎泝



して(勁)き、天籟・地籟の碎泝として厲しき、あはれ、秋の萬象、何物か

抱一などいふ畫家が(物)々たるこの一物に、大膽なる落想をこめ

て、一幅の秋のこゝろを(勁)く限なく、
淋瀝揮灑し出だせる、詩眼流石

(柿) 力の秋

に凡にはあらざりけり。
見よ、秋の潭に淵黙の智あり、秋の空に剛明の象あり。月は清輝を帯び、星に聲あり。萬葉に埋もるる柿井の水、なほ鬢眉を鑑すべく、夢を歌ふ満園の蟲しぐれ、人の深省をいざなふ。空際きはやかに走る波濤の山、極目鮮やかに、一河の帶、樹間の聲の錚々として厲しき、あはれ、秋の萬象、何物か

道士の風岸

如々たり
明瑩
豐瞻

すべてこれ、空明照徹剛克雄健の一氣を以て貫かざる、何物かすべて哲人の雄姿、道士の風岸を以て人に迫らざる。秋は夢に非ずして、事實なり。人は秋に立つて、たゞちに事實と面相接するなり。秋は何等の天文地采の形式を藉らざる、裸體の儘なる思想なり。それは如々たり。故に明瑩なり、澄徹なり、而してまた充實なり、豐瞻なり。春草の紗、夏木の衣、すべて名残なく脱ぎすて、あらはなる葛蘿の筋、樹幹の骨、健くもまた雄々しき丈夫神の面影は、げに秋にこそふさはしけれ。もし秋に一味の文采ありとせば、百蕪、紅蓼の裳、裾、蘆花、淺水の帶、桔梗、荳蔻、尾花が波の袂も、輕き姿なるべし。あはれ、その澹如たるすゞしきは、かの哲人、道士の婆娑たる一衣の高風にも似たるかな。至竟、秋の力は、その衣にあらずして、赤裸々の事實にあり、思想にあり。

病間録

耳理章三郎

兵庫縣の人、明治六年生、倫理學者、東京高等師範學校教授。

Handwritten notes in the top right margin of the right page, including the name '耳理章三郎' and other characters.

三 永遠の生命

耳理章三郎

個人の生命には限がある。永遠を求め無窮にあこがれても、限られた生命は如何ともし難い。生きた者の惱はそこに發生するのである。かの佛教や耶蘇教で、次の世に天國とか、極樂とか、乃至淨土とかいふやうな世界を假定し、そこに永遠の生命があるとして、衆生を導き且勵まざうとするのも、畢竟この生きた者の惱をいやさんがためである。然るに、我が日本精神はその永遠の生命をさういふ無何有郷に求めないで、現實なる日本の國そのものに見出す。我等日本民族は、この國を愛することによつて、この國に永遠に生きようとす。この吾人の身體は數十年を待たずして死んでも、この國を愛する一念によつて、この國に永遠の生命を創造する。

若林強齋

名は進居、山城國京都府の儒者、享保八年(一六三三)歿、年四十五。

Handwritten notes in the top right margin of the left page, including the name '若林強齋' and other characters.

藤田東湖

名は彪、水戸藩士、勤王家、安政二年(一八五〇)歿、年五十。

Handwritten notes in the top right margin of the left page, including the name '藤田東湖' and other characters.

我等は、代々我等の祖先の魂がこの國と共に永遠に生き、永遠にこの國を護つてゐると信じて來た。江戸中期の學者若林強齋は、大和魂の立志といふことを述べて、よくその點をあきらかにした。即ち彼は、志を立てるのはこの五尺の身體の生きてゐる間だけではない。この身體は(假令)衰へても(斃)れても、天つ神より下し賜はる御玉(御魂)をどこまでも忠孝の御玉と守り立て、天つ神に復命して八百萬の神の下座に列り、國家を鎮める靈神となるに至るまでずんと立て通すことである。といつてゐる。これは畢竟我が日本の國民は、誰でも赤誠を以て國の爲に力を盡くすならば、その清らかな精神は神そのものとなつて、永遠の生命をつゞけることが出来るといふことを道破したものである。

維新前にあたつて若き日本の士氣を鼓舞作興した藤田東湖、

あの東湖の有名な回天詩の一節に、苟も大義を明らかにして人心を正しうせば、皇道奚ぞ興起せざるを憂へん。斯の心奮發して神明に誓ふ。古人言へるあり、斃れて後已む」といふのがあ



湖 東 田 藤

りである。それで遂に斃れたら、古人のいふ通り萬事休むのだ」といふ雄々しい志を述べたものである。然るにその翌年に出來た彼の正氣の歌は、劈頭日本の地理を

道は地を大
至剛の勢を解る

藤田東湖筆

三決、死矣而不死。二十五回渡、刀水、五乞、閑地、不得閑。三十九年七處、徒、邦家、隆替、非、偶然、人生、得失、豈、徒、爾、自、驚、塵、垢、盈、皮膚、猶、餘、忠、義、填、骨髓、嫖、姚、定、遠、不、可、期、丘、明、馬、遷、空、自、企、苟、明、大、義、正、人、心、皇、道、奚、患、不、興、起、斯、心、奮、發、誓、神、明、古、人、云、斃、而、後、已、

詠んで、粹然として神州に鍾る正氣即ち大和魂が、如何に立派な國史を作り來つたかを稱へ、次いで永遠に死なぬ日本精神の活

三決死矣而不死二十五回渡刀水五乞閑地不得閑
三十九年七處徒邦家隆替非偶然人生得失豈徒爾
自驚塵垢盈皮膚猶餘忠義填骨髓嫖姚定遠不可期
丘明馬遷空自企苟明大義正人心皇道奚患不興起
斯心奮發誓神明古人云斃而後已

動に言及し、乃ち知る、人亡ぶと雖も、英靈未だ嘗て**泯**びず、長へに天地の間に在りて、隠然として驍倫を敍するを」と續けて、忠臣

四維

禮義廉恥

烈公

徳川齊昭 水戸第九代藩主、萬延元年(二五〇)薨、年六十一

斃れて後已む

俛焉 日有孳孳。斃而後已。(禮記)

義士の精神力は決して肉體と共に亡びるものでないことを説き、末尾に至つて、自分の覺悟を述べて、「生きては當に君を雪ぐべく、復四維を張るを見ん。死しては忠義の鬼となり、極天皇基を護らん。」といつてゐる。これは、自分の生きてゐる間は、主君烈公の冤を雪いで、道德を此の世に明らかにしよう。が、死んだら、忠義の靈魂となつて、天地の有らんかぎり永遠に皇基を護り奉らう。」といふのである。

前年の回天詩では、生きてゐる中はやるが、死んだが最後、萬事休むのだといつたが、此の詩では、生きてゐる中は勿論、死後と雖も活動は休止せぬといふ考に進んだのである。

元來「斃れて後已む」といふ言葉は、支那の禮記といふ書物にある。幼少から此の書を精神の糧としてゐた彼は、多分その感化を受けて、それを箴言としたのであらう。然るに、その後、段々

石路のつづき

斃れて後已む

二回

死に 礼記

吉田松陰

名は矩方、長州國(山口縣)藩士、勤王家、安政六年(三五)に刑死、年二十九

仲 睦と云ふことと云ふ

ふと云ふことと云ふ

我が國史の精神に深く立入つて、幾多忠臣義士の研究を進めた結果、斃れて後已む」などいふところまで止つてゐられず、こゝに天地のあらんかぎり皇基を護るといふ日本精神の體現者となつたのである。

吉田松陰もまたさうであつた。かの有名な士規七則には、死して後已むの四字、言簡にして義廣し。堅忍果決、確乎として抜くべからざる者は、これを(舎)きて術なきなり。」とある。彼はかやうに、死して後已むといふことを以て、男兒が覺悟を定める唯一無二の方法だと考へてゐた。然るにその翌年になると、楠公七生の説を作つて、楠公兄弟はたゞ七度どころではな、千たび萬たび生まれかはつて、永遠に死なない。」といひ、こゝに明らかに日本精神の永遠の生命に悟入した。かくて、彼は、その絶筆たる留魂録に、雄々しくも、

大和志一をたすむるの身

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも

とよめおかましやまとだましひ

わが身を人としてまた

を例となさるしん

るまゝ・ロマンとして

此の身をたすむるの身

ありや 伊一人もまた

う。

純粋の神や神

す一精をとりしん

。精神をたすむる

るまゝ

。

。

。

と、詠じてゐる。東湖松陰の兩英傑が支那精神の粹から一轉して、日本精神の粹を自覺するに至つたといふことは、いかにも意義深いことといふべきである。この兩英傑の覺悟自覺こそ、實に日本精神が皇國に永遠の生命を見出すといふ最もよい例證である。かやうに此の皇國を愛し、此の皇國に永遠の生命を創造してこそ、我々はほんたうの日本人になり得たといふことが出来るのである。

張るるのツツキ

知行

(國民道德)

四 國語の變遷

編

者

言語は絶えず變化してゐる。しかも其の變化は急劇にあらはれるものではなく、極めて徐々に連続的に行はれて行くものである。従つて國語の歴史についても、その時期區分をする事は頗る困難である。紀元何年を境として、それ以前がどう、それ以後がどうといふやうな、明確な區分は勿論出来ることではない。しかし吾々は國語遷移のあとを通覽する時に、おぼろげながらも、或色の濃い部分と、他の色の濃い部分とがあるやうに感じる。その境界はぼかされてゐて、何處と明確には指し難いけれども、さうした色の濃いと思はれる部分々々を中心として見れば、やはり或程度迄は時期の區分が出来るやうに思はれる。而して其の區分は、史料の少い奈良朝以前はさておいて、それ以

國語の變遷
國語の變遷
のいふ體も、概中
下あり

一平 成 里 宗 山 宗 子
ナニス

後を大體上古奈良朝時代・中古平安朝時代・近古鎌倉室町時代・近世江戸時代・近代明治以後といふやうに、政治史のそれに準據して、甚しく不自然ではないやうである。畢竟政治上の變革、政治中心の移動は人心の動搖を招致するものであり、人心の動搖は言語の上に反映せられずには已まないからである。左に國語變遷の跡を大觀して見よう。

奈良朝時代は、漢學や佛敎も盛んであり、制度文物すべて外國のものを取入れるに急な時代であつたから、外來語の國語に取り入れられた數も、非常に多かつたことと思はれるが、歌の上にははれたものは極めて少い。散文の中には割合に多く見えるが、それもすべて名詞としての資格を與へられてゐるものばかりである。わが國語には限らないが、外來語の輸入は、殆どその國語の語彙を富ますだけで、語法までも影響を受けることは極

普通通文

語彙

めて少いものである。

平安朝時代は、平安奠都から約四百年、政治の中心が鎌倉に移るまでの間をいふ。前代に引續いて重んぜられた漢文學が、一時全盛を極めた結果として、和歌の暗黒時代を現出したが、やうやく國粹に自覺めては和歌の復興となり、つひには古今集勅撰まで展開して行つた。平假名片假名は萬葉假名から脱化して、國語の表記は愈、便利になつた。そこに散文の文學が發達し、國語は愈、精鍊せられた。

和歌の用語は、前代から或意識をもつて選ばれたのであるが、この時代になつては愈、限定せられて、話語とはますます距離が出來た。たゞに和歌の用語ばかりでなく、散文の用語も朱雀天皇の頃から次第に話語から離れる傾向を持つたらしい。この時代の末に至つてはかうした傾向は益、顯著となり、平安朝盛

古今集勅撰
古今集二十一卷、醍醐天皇の延喜五年二月、天長に貫之・友則・躬恒・忠岑等が勅を奉じて撰進した。

は行 あひてしるる
あてしるる
あて
 はて
 の、らるる
 祥しし祥そ
 う行四段
 原より後
 この物、しりしり
 強んずり、まふあり
 ばあてて、はあてて

時の言語は、以後、長く文語の標準となつたのである。
 この時代、引續き漢語が輸入せられて、形容詞・動詞・副詞等にも
 用ひられるやうになつた。それが殆ど國語化した姿をもつて、
 物語などにも現れてゐる。
 この時代の末は、所謂院政時代である。この頃になると、促音
 便やバ行四段・マ行四段の動詞の長音便が現れ、二段活用の一段
 化の傾向もやゝ強くなり、また連體形の終止形同化の傾向を生
 じて、次の時代に於ける大變化を豫想せしめてゐる。藤原氏の
 勢力が衰へ、武士が實力を得始めたことなどから、地方語が京都
 語に影響する事が多くなつた結果であらうといはれてゐる。
 鎌倉室町時代は、鎌倉幕府時代、吉野朝時代、室町幕府時代を
 含んだ約四百年間で、要するに武士の**跋扈**した時代である。この
 時代は概していへば戰亂多く人心は定まらず、學問・文藝不振の

ハ行
 イ列
 上三段、上二段、下四段
 原より後
 起す、能止り、用、
 せそてくくくハ五下
 けろ
 せり
 二行四段
 一段に轉寫

時代であつた。文語と話語との懸隔は益、甚しくなつたが、その
 文語も和歌はとにかく、散文に至つては、前代のものを模しきる
 ことが出来ないで、所々に當時の話語の面影を**視**かしてゐる。
 一方にはまた漢文脈を多分に取入れた和漢**混淆**の文章が發達
 して、漢語の國語に入り来るものは愈、多くなつた。漢語はかう
 した文字の上から移植せられた外に、この時代には、主として禪
 僧によつて、直接支那から輸入せられたものが少くない。例へ
 ば**普請**・**行燈**の類である。建ソルヲカテ普請トイフ
 江戸時代は、江戸幕府の時代約三百年で、戰亂すでに治り、人々
 太平を樂しんだ時代である。この時代は、室町時代の言語を承
 けて話語の整理せられた時代といふべく、動詞では「落つる」受く
 る等の二段活用の形は漸次滅亡して、落ちる・受ける等の一段活
 用に統一せられ、音便では「忍うて」「頼うて」等、バ行四段・マ行四段の

室町時

ようりうに用ふ

用ふ葉、しよらとせしむ

長音便が廢退して、忍んで「頼んで」等の撥音便が進出し、關東語が勢力を得て後は「流いて」の如きサ行四段のイ音便は、もとの形に還元せられた。助動詞「よう」未來「です」指定等の發達もあるが、三百年を通じて、概しては甚しい變化を見ない時代である。方言では、江戸の發展と共に江戸言葉が發達し、次第に勢力を得て、文藝上では今まで關西方言の爲に「虐げられて」ゐた關東方言の爲に氣を吐くに至つた。江戸時代の文語は、大體に於て前代の繼承であつたが、元祿頃から振ひ興つた國學者は「雅醇」な古の國語に「憬」れて、その國語相を己等の時代に再現しようとして、其の「漢籍」の讀方が國語を混亂せしめた事も多かつた。

明治の普通文は、實に漢文讀下しの影響を受けたものであつたのであるが、明治二十年代から動き始めた言文一致更生の機

柳菴の文章減消

水田日川

運は花を開き、實を結び、種々「試鍊彫琢」を経た後、大正時代に入つては、威嚴の不足感から容易に採用せられなかつた新聞の論說等に迄採用せられるやうになつて、文語文はだん／＼影を潛めて來た。

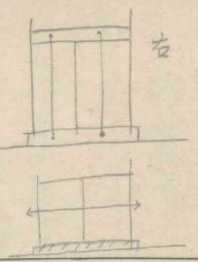
外國語や外國語格を取入れる事は、國語を豊富にし、表現に新しみを加へる利點もあるが、その「濫用」は國語の純正を害するもので、嚴に戒めなければならぬ事である。名山・名川には日本アルプス・日本ラインの如く外國名をつけ、國産品にも片假名で西洋流の名をつけて得々としてゐる現代は、誠に外國語濫用の時代だといはれよう。吾等の周圍には西洋風の名をつけたものが如何に多くある事か。これでは既に精神的に彼等に屈服して了つてゐるのであつて、世界諸國の上に立つて、世界の文化を指揮する事はまだ／＼前途「遙遠」だといはねばならぬ。

外國語の善悪ハ
 人々の職環境ヨリ
 見テ言ハルベシ
 ドイツ、アメリカ等ノ
 學者ハ日本文字ヲ
 シテ日本精神ヲ見
 破ラントシヤル

〔備〕國語は上述の如くそれ自身の動きにより、又外國語を取入
 れる事によつて、幾變轉した。併し其の根柢の本質は少しも變
 つて居らぬ。どこ迄も我等祖先の精神がその中に生活したと
 ころの國語である。東西二大方言の中にも、又多くの小さな方
 言を有する、併し夫も畢竟根柢を得て茂る枝葉である。我等は
 今も其の中に住して、縦には祖先の心を受け、横には同胞相結ぶ。
 國語は實に一國の標識であり、國體を維持し國民を結合する精
 神的の鎖である。これを世界の歴史に見るに、一國の國語の消
 長は、その國の國語の消長に緊密な交渉を有つてゐる。故に我
 等は現代の外國語濫用を悲しむと共に、方言の統一が遅々とし
 て行はれぬ事をも悲しまなければならぬ。方言は國語の表面
 だけの相違ではあるにしても、その相違は國語の力を殺ぐ事が
 極めて大きいものである。而して方言の統一は學校に於ける

國語教育だけで出来るものではない。新聞雜誌文學作品等も
 與つて力はあるものの、猶それだけでは出来るものではない。
 要は國民全體の自覺と努力とに俟たねばならぬのである。
 現在は、大體東京語が標準になつてはゐるが、未だ標準語の間
 題は明確に具體的に解決せられては居らぬ。方言統一に向つ
 て進むに方つて、まづ必要な道標は標準語でなければならぬ。
 更に國語を純正ならしむるには如何にすべきか。漢字と共に
 取入れられた無數の漢語、近世以後取入れられた多くの歐米語、
 これ等の整理を如何にすべきか、假名遣を如何にすべきか。こ
 れ等はすべて國民全體の自覺に俟たなければならぬ事柄であ
 る。國語の愛護、それは一部の學者間のみ唱へられて、未だ國
 民全體の聲とならぬのを悲しむ。

(國語史概説)



ならばしこそ... 心ゆく 足らはぬ 延る 誰かは... 心き 林にやどる 鷓鴣云々 鷓鴣深林ニ集クヘドモ一枝ニ過ギズ、飯鼠河ニ飲メドモ腹ニ満タスニ過ギズ、莊子逍遙遊

五雅文抄

一 知足庵の記

あはれ世のならはしこそはかなき物はあなれ。高き賤しき品いと異なりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは稀にて、唯足らはぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとては梢の嵐をうらみ、月をめぐるとては尾上の雲をいとふためし、誰かはのがるべき。林にやどる鷓鴣は僅かなる小枝の影をのみたのみ、流に水求むる鼠は、たゞ腹にみたすに過ぎず。とこそ古人もいひつれ。かゝることわりをだに分たば限あるこの世に、限なきことを思ふべきか。茲に中村のぬしなむ能く塵の世のけがしきをのがれて、萱の

梅尾の昔を云々 建久二年(五二)曾茶西が宋から持ち歸つた茶の實を山城國梅尾の明恵上人が深瀬の園に植ゑた。これが我が國の茶のはじまりであるといふ。古人云々 足ルヲ知ル者ハ富キリ。(老子第三十三) ことわりにこそかなはめ あげつらふべくもあらざりけり うべなく... 名づけしこと 琴後集 十五卷、村田春海の歌文集、村田春海(東京市)の人、國學者、眞淵の門人、文化八年(四二)歿、年六十六。 遠帆歸處 孤館宿ル時風雨ヲ帯ビ、遠帆歸ル處水雲ニ連ル。(唐の許渾)

二 旅泊

軒松の樞に心の月をすましめ、花をつむ夕關伽をくむ曉御佛につかふる暇ある時は、冰をくだき雪を煮て、梅尾の昔をしのぶ。わが心に、あれば彼の古人のいひけむことわり、にこそかなはげつらふべくもあらざりけり。うべなく、この住家をしも、足ることを知るとは名づけしこと。 遠帆歸處水連雲など打誦じ續くるに、今宵の泊りはかの見ゆる磯山のかげにやなどいふも、いつしかと心もとなきに、日さへ暮れぬれば、いと心細し。船人の習として、夜船漕ぐには知るも知らぬも呼びかはしつゝ、をちこちかたみに力添ふめるもあ

暮るれば
暮れぬれば
添ふめり

打臥しをり

たゆたふ
高くこそと

寐おびる

はれなり。風や、吹きしきりて浪高く立ちくるに、そこはかとなく漂ふこゝちす。船人の「あまけなり。」といふに、「いましばしのほどをいかならむ。」と心のみ碎かるゝも、楫の力には及ばねば、「よしさはれ。」とて、屋形のうちに頭さし入れて打臥しをり。夜中ばかりにやあらむ、「辛うじて船つきぬ。御心休めたまへ。」といふもいと嬉しきに、「こゝもとにこそは。」とて錨落し入れたる音の枕上に響きたるこそまたなく嬉しけれ。されどなほ船のいみじうたゆたふは、なごり高くこそと思ふに、こゝちもあしけれど、かばかりはとて人々も寄りふしぬ。船人あな苦しやとて汗押拭ひつゝ、苦葺きわたし、粥打啜りなどしてしづまりぬ。雨降りいでて隙漏る雫もわびしきに、沖の方にいと遠く細き聲にあまたゝび呼ぶなるは後れし船にやと思ふに、いらふる人もなければ船人を突き驚かすに、寐おびれたる聲してたゞ一わた

すさ

おどろくし

樞園文集

三卷 中島廣足の隨筆
中島廣足一肥後國(熊本縣)の人、國學者、元治元年(二五四)歿、年七十三。

都にありつる程云々
享保十八年(三三三)三十七歳にて京都に上り荷田春滿に御事しむたる四年の間、今は
元文三年(三三九)江戸(東京市)に出府以後、たらちね

りうちいらへたるは、「いかでか聞きしらむ。」とおぼつかなきに、ずさして呼ばするも、例にたがひたるあやしき聲とや思ふらむ。辛うじて漕ぎいれて「危かりけり。」といふくゝこの船のかたへに錨おろすも、「げにいかばかりにか。」とくはしうも問ひ聞かまほしきに、こなたの船人「さこそありけめ。誰もおなじかりけり。」といとねぶたげにいひて、やがて鼾おどろくしうしたるも情なくこそおぼゆれ。さて寝たるにいかでか夢も結ばむ。

(樞園文集)

三家

路

あはれ都にありつる程は、あからさまながら年のはに故郷に歸りなどしければ、さのみもあらざりしを、今はたはやすくも歸るまじく思ひなしつれば、千里の遠に老いたるたらちねを置きまつりて、とみの事ありともいかにかてかしらをしるともいかにか

人やりならぬ
さわがれつること

友垣

垣ヲ結
交ヲ離

あらまし

品川

今、東京市の一區、
品川町。
ゆほびか
伊豆
静岡縣に屬する。
安房
千葉縣に屬する。

とみにゆきいたらむ、今やいかなる事かあらむ、いかなる心にか
ますらむなど、人やりならぬ胸さわがれつること、日ごととにあり
しを、世のさかにはあはれなるものにて、うつたへに忘るとはあら
ねども、友がきもいで来て、高きいやしきゆきかひしけるに、二つ
なき心のまぎれやすく、過しぬ。此の秋はいざなふ人さへあ
れば、いでや母をもをかみ、つま子はらからにも逢はばやとて後
の七月八日つとめてたち出づ。

此のあらましいふ頃、人々別れ惜しむとてからやまとの歌一
百ばかりもあらむかし。そはこと物にしるしつ。友がきのな
ごりなきにしもあらねど、ちぎりおく日數いくばくならねば、先
すゝまるる心には痛しとも思ほえず。
品川の驛わたりは、海の面ゆほびかなり。夜の雨晴れて、白雲
おほく、海の空にかゝれるは、伊豆のみ崎と安房の大山となり。

竹道

ゆかしきや

關吹きこゆる
秋風の關吹きこゆる
たびごとに、聲うち
添ふる須磨の浦波。
(新古今集)

岡部日記

賀茂真淵の歸郷日記
文。
賀茂真淵一號は縣居
遠江國(静岡縣)の人
國學者・歌人。明和
六年(西元一七九八)歿、年七
十三。

此の所は袖の浦とぞいふなど、あをだかく奴のみだりに言ふは
をかしきものから、いづくにまれときあらひぎぬ著む日までは、
其の名のゆかしきや。朝風いとしく身にしむに
旅人は衣手さむししばしなほ
こゝろして吹け浦の秋風

「關吹きこゆる。」など、詠みけむ思ひ出でらる。富士の山はひ
つじさるの空に見ゆ。是ぞおのが眺むる方なるに、故郷人はこ
なたをこそと思ふもこたひはうれし。をちつとし東に來にけ
るほどに

東路にありて聞きつる富士の根を

夕日の空にかへりみるかな

とながめて、かぎりなく遠くも來にけりとわびつるにはかは
れり。

(岡部日記)

枯淡 ↓ アヤリニキキ
北条師ナシ

去 來

姓は向井、名は義焉
肥前國(長崎縣)の俳
人、寶永元年(三三〇)
歿、年五十四。

落柿舎

小倉山麓(京都市右
京區)にあつた去來
の別荘

王祥云々

丹奈有リ實ヲ結ブ、
母命ジテ之ヲ守ラシ
ム、風雨毎ニ祥帆チ
樹ヲ抱イテ泣ク、其
ノ篤孝純至此ノ如シ。
(晉書王祥傳)

天の帝云々

第三十八代天智天皇
農民の辛苦をおぼし
めされた。

いとみのゝしる

六 俳 文 抄

一 落柿舎の記

嵯峨に一つのふるや侍る。そのほとりに柿の木四十本あり。
五とせ六とせを経ぬれど、このみも持ち來らず代がふるわざも
きかねば、もし雨風に落されなば王祥が志にもはぢよ。もし鶯
鳥にとられなば天の帝のめぐみにもれむと、屋敷もる人を常
はいとみのゝしりけり。

ことし八月の末、かしこにいたりぬ。折ふしみやこより、商人
の來り、立木にかひ求めむと、一貫文さし出し悦びかへりぬ。予
は猶そこにとままりけるに、ころくくと屋根はしる音、ひし／＼
と庭につぶるゝ聲、よすがら落ちもやまず。明くれば商人の見

むかふ髪

かへしくれたびて、
むや、

素 堂

本名山口信章、甲斐
國(山梨縣)の人、俳
人、享保元年(三三六)
歿、年七十五。

ちよよ

風の音きゝ知りて、
八月ばかりになれば、
ちよよくとはかな
げになく、いみじう
あはれなり。(枕草子)

鬼の子云々

蓑蟲いとあはれなり、
鬼のちみければ、親
に似てこれもおそろ
しき心あらむとて云
云。(枕草子)

瞽 叟

舜の父、頑で舜をに
くんだ。舜は支那古
代の聖王。

舞ひ來たり、梢つくくくと打眺め、我むかふ髪のころより、白髮生
ふるまで、この事を業とし侍れど、かくばかり落ちぬる柿を見ず、
きのふの價かへしくれたびてむや」とわぶ。いと使なければ、
許しやりぬ。この者のかへりに、友どちの許へ消息送るとて、み
づから落柿舎の去來と書きはじめけり。

二 蓑 蟲 説

みのむしく、聲のおぼつかなきをあはれぶ。ちよよちよ
よとなくは、孝に専なるものか。いかに傳へて鬼の子なるらむ。
清女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも瞽叟を父として舜あ
り、汝は蟲の舜ならむか。

みのむしく、聲のおぼつかなくて、かつ無能なるをあはれ

素

堂

(風俗文選)

風俗文選

俳文集、森川許六の撰

森川許六一芭蕉の門人、正徳五年(二五五)歿、年六十。

横井也有

名は時般、尾張國(愛知縣)藩士、俳文家、天明三年(三四三)歿、年八十二。

さてこそ...けめ

莊周が夢

莊周が夢に胡蝶になつたことが其の著莊子に出てゐる。

古今の序に

花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。

ぶ。松蟲は聲の美なるが爲に、籠中に花野をなき、桑子は絲を吐くにより、からうじて賤の手に死す。

みものむしく、

無能にして静かなるをあはれぶ。胡蝶は花

にいそがしく、蜂は蜜をいとなむにより、往來おだやかならず、誰がためにこれをあまくするや。

三百 蟲

譜

横井 也有

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物のかぎりなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ、莊周が夢もこの物には託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。隴月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺ましたれば、この物の事、更にも誇り難し。

古池に

古池や蛙とび込む水の音。(芭蕉)

翁

松尾芭蕉。

やがて死ぬ

やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲。(芭蕉)

すだく

貧の學者

晉の車胤は家が貧しかつたので、夏には練絹の囊に螢を入れて、其の光に照らして書を讀んだ。(晉書、車胤傳)

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば、初蝶とも初蛙ともいふ事をきかず。この物ばかり初蟬といはるるこそ大きな手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇はたゞこの者の爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、この者の本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならむ。つくくほふしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死してこのものになりた

蜀魂
蜀の望帝の魂魄が化してこの鳥になつたといふ傳説がある。

退隱の媒

楚の麴杏は蜘蛛の巢に蟲がかゝつて死ぬのを見て無常を觀じ、官をやめて退隱した。(金樓子)

りと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにもおとるべからず。

蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せむとす。ろこしのむかしには、退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代朝敵のはじめとして、頼光をさへおびやかしたるいと恐し。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、いさゝかあはれ添ふる折もあらむか。彼はかひくしく巢作りてこそあれ、東海道にちりほひたる宿なし者をば、くもとはいかていふやらむ。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲はたがために身をこがすや。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は不物ずきの謗となれり。おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲はいやし。

槐安の都

淳于棼夢に大槐安國の郡守となつた、夢がさめて古槐の下を尋ねて見ると、大きな蟻の穴があつた、それが槐安國であつた。(異聞集)

千丈の堤

千丈ノ堤モ螻蟻ノ穴ヨリ潰ユ。(韓非子)

歐陽氏

文は憎着蠅賦に出づ。

長嘯子

木下勝俊の號、文は「紙魚を憐むの詞」に出づ。

蟻螂

蟻螂ノ斧ヲ以テ隆車ノ隆ヲ禦ガント欲ス。(文選)いかつ

蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるもたよりあしきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒に噛まるる蚤はたましくにして、猿の手にさぐらるゝ虱は逃るゝこと難かるべし。

蝸牛は、只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家はもちたれども、行く先々をおひ歩くは、水雲の安きにも似ず。蛇(ヘビ)の足なくとも歩むべくば、蜈蚣(ムカデ)をさむしの數多きは不用のことなり。

蟻螂(アリカゲ)の瘦せたるも、斧を持ちたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。

原 駿河國(靜岡縣)駿東郡

吉原 同國富士郡

附けたるなら
むくつけし

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ、原吉原を駕にのりて、富士を詠めゆく人には似たり。

促織ウツクシ鈴蟲スズムシ響蟲は、その音の似たるを以て名によべり。松蟲の

その木にもよらで、いかてかく名を附けたるならむ。毛生ウモヒひむくつけき蟲にもおなじ名ありて、松を枯らし、人にうとまる。一

つ在處に二人の八兵衛ありて、一人は後生をねがひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月ウツキの頃、端居ウツキめづらしき夕

べ、始めてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃、力なく残りたるは寂しきかたもあり。蚊帳釣りたる家のさま、蚊遣ウツキ焚く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄ウツクシには、いかに團扇の隙なかりけむ。(稿) 杏

七賢

支那晉の嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎等七人、竹林に隠れて清談に耽つた。

鶉衣

十四卷、横井也有の俳文集

本居宣長

號は鈴の屋、伊勢國(三重縣)松阪の人、國學者、享和元年(三十四)歿、年七十二。

見給へしカード

七 雪のあした友の許に

本居 宣長

今朝のけしきめづらしくは御覽ぜずや。冬になるより、いつしかとのみ日ごとに待ちわたり侍りしに、昨日のゆふべ、風いたく吹きあれ、雲のたゞずまひもいみじくさえわたりて、飛ぶ鳥のけしきまで、必ずふりぬべき空とは見給へしかど、いとかくまで深くとは思ひ給へかけざりきかし。明暮心へだてぬ友どちは、かゝらぬ折だに何事につけても、まづ思ひ給へ出でらるゝわざなるを、ましてかくめづらかなる朝ぼらけを、心なき身のひとりのみ見侍らむことの、いとあたらしく思ひ給ふれば、よし跡ついても人の訪ひたまはましかば、こよなくをかしさもまさりぬべきものと思ひ給ふるに、いかにとだにおとづれもし給はぬは、いと思はずに怨めしくなむ。

おぼさるゝらむもの

このけしき、さりとも見過ぐし難くはおぼさるらむものをとは、思ひやり聞えさすれど、しろしめすやうに、いとらひしき口には、何事もいはれ侍らず。筆尻取、さきとる、筆を削ぐ、しりとり、筆のしりとるはかせだに侍らで、とりつくろひ侍らむやうも侍らねば、思ひ給ふる程の心も、たゞおしこめてなむ。

そこには、いかに見どころある心ふかき言の葉多く物し給ふらむ。一つ二つ賜はせよかし。さてなむせば、き庭の雪の光も加はりて、友なき今朝のさうさう、さう、さうしきもなぐさめ侍らむ。いでやかく聞えさするも、もとよりあやしき鳥の跡の、けさはいと筆のさきしみこほりて侍れば、御覽じわくかたも侍らずや。あなかしこ。

(鈴屋集)

さうし

徒然草

吉田兼好の隨筆。吉田兼好、姓は卜部ともいふ、山城國(京都府)の人、鎌倉末期の文學者、正平五年(1190)歿、年六十八。

顔回

字は子淵、支那魯の人、孔子の高弟。

志人に云々

顔淵曰ク、願ハクハ善ニ伐ルコトナク、勞ヲ施スコトナケン。

(論語)

志をも奪ふ

匹夫モ志ヲ奪フベカラズ。(論語)

八 徒然草抄

一 顔回

顔回は、志人に勞をほどこさじとなり。すべて人を苦しめ、ものを奪ぐること、いやしき民の志をも奪ふべからず。又いとさきなき子をすかし、おどし、いひはづかしめて興ずる事あり。おとなしき人は、まことならねば、ことにもあらず思へど、をさなき心には、身にしみておそろしく、はづかしく、あさましき思まことに切なるべし。これをなやまして興ずること、慈悲の心にあらず。おとなしき人の喜び怒り、悲しび、樂しむも、皆虚妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身をやぶるよりも、心をいたましむるは、人をそこなふことなほ甚し。病を受くることも、多くは心より

汗を求む
夫レ藥ヲ服シテ汗ヲ
求ムルニ或ハ獲ザル
アリ、シカレドモ、
愧情一タビ集マレバ、
渙然トシテ流離ス。
(文選)
凌雲の額
支那魏の章詠の故事

受く。外より来る病は少し。薬を飲みて汗を求むるには、しるしなきことあれども、一旦恥ぢ恐るゝことあれば、必ず汗を流すは心のしわざなりといふことを知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人となりしたためしなきにあらず。

(第二百二十九段)

二 ものに争はず

ものに争はず、己を枉げて人に従ひ、わが身を後にして、人を先にするには如かず。よろづの遊にも、勝負を好む人は、勝ちて興あらむためなり。おのれが藝のまさりたる事を喜ぶ。されば負けて興なく覺ゆべきこと、又知られたり。われ負けて人を喜ばしめむと思はば、更に遊の興なかるべし。人に本意なく思はせて、わが心を慰まむこと徳にそむけり。むつまじき中にたは

ものに争はず
君子ハ争フ所無シ。
(論語)
わが身を後にす
仁者ハ己立タント欲
シテ人ヲ立テ、己達
セント欲シテ人ヲ達
ス。(論語)

公治長

道ヲ学ブ者ハ其ノ道ヲ
シテ人ヲ立テ、己達
セント欲シテ人ヲ達
ス。(論語)

物書かれ

筆をとれば物書かれ、
樂器をとれば音を立てむと思ふ。盃を
とれば酒を思ひ、賽をとれば擲うたむことを思ふ。心は必ず事
に觸れて来る。假にも不善のたはぶれをなすべからず。あか

ふるゝも、人をはかりあざむきて、おのれが智のまさりたることを興とす。これ又禮にあらず。さればはじめ興宴よりおこりて、長き恨を結ぶたぐひ多し。これ皆あらそひを好む失なり。人に勝らむことを思はば、たゞ學問して、その智を人にまさらむと思ふべし。道を學ぶとならば、善にほこらず、ともがらに争ふべからずといふことを知るべき故なり。大きな職をも辭し、利をもすつるは、たゞ學問の力なり。

(第三十段)

三 筆をとれば物書かれ

筆をとれば物書かれ、樂器をとれば音を立てむと思ふ。盃を
とれば酒を思ひ、賽をとれば擲うたむことを思ふ。心は必ず事
に觸れて来る。假にも不善のたはぶれをなすべからず。あか

ひろげさらまし
かば

生祥るんじと

珠匠の心は
外相若し

らさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むることもあり。假に今この文をひろげざらましかば、この事を知らむや。これ則ち觸るゝところの益なり。心更に起らずとも、佛前にありて數珠をとり、經をとらば、怠るうちにも善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも細床（細床は坐すべし）に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事理もとより二ならず。外相若し背かざれば、内證必ず熟す。強ひて不信といふべからず。仰ぎてこれを尊むべし。
（心持） 十八日

(第百五十七段)

四 一道にたづさはる人

一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろに臨みて、「あはれ、我が道ならましかば、かく餘所に見侍らじものを」といひ、心にも思

などか…けむ
ありなむ
あらむ

徳
利益

長じぬる人

へること、常のことなれど、よにわるく覺ゆるなり。知らぬ道のうらやましく覺えば、「あな、うらやまし。などか習はざりけむ」といひてありなむ。我が智を取りいでて人に争ふは、角あるものの角をかたぶけ、牙あるものの牙をかみいだすたぐひなり。人としては善に誇らず物と争はざるを徳とす。他にまさることのあるは大なる失なり。品の高さにて、才藝の優れたるにても、先祖の譽にて、人に勝れりと思へる人は、たとひ詞に出ててこそいはねども、内心にこそはくの咎めあり。慎みてこれを忘るべし。をこにも見え、人にもいひつたれ、禍をも招くは、たゞこの慢心なり。一道にも誠に長じぬる人は、みづから明らかにその非を知る故に、志常に満たずして、遂に物に誇ることをなし。

(第百六十七段)

五人のものを問ひたるに

人のものを問ひたるに知らずしもあらじ、ありのまゝにいはむは、をこがましとにや、心まどはすやうにかへりごとしたるよからぬ事なり。知りたることも、なほさだかにと思ひてや問ふらむ。またまことに知らぬ人も、なほさだかなからむ。うらゝかにいひ聞かせたらむは、おとなしく聞えなまし。人は、未だ聞き及ばぬことを、わが知りたるまゝに、さてもその人の事のおさましさなどばかりいひやりたれば、いかなる事のあるにかと、おし返し問ひにやるこそ、心づきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞きもらすこともあれば、おぼつかかなからぬやうにつげやりたらむ、あしかるべきことかは。かやうのことは、もの馴れぬ人のあることなり。

(第二百三十四段)

いひ聞かせたらむ、聞えなまし

九新島守

四月二十日、^{八十九代順徳天皇}帝ありさせ給ひ、^{東宮}春宮四つにならせ給ふに譲り申させ給ふ。近ごろ皆この御齡にて、^{受禪}ありつれば、これもめでたき御行末ならむかし。同じき二十三日、院號の定めありて、今おりさせ給へるを、^{新院}と^{聞ゆれば}御兄の院をば、^{申院}と申し、父みかどをば本院とぞ聞えさす。このほどは家實のおと、攝政にな白にておはしつれど、御讓位の時、左大臣道家のおと、攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。

さて、も院のおぼし構ふること、忍ぶとすれどやうくもれ聞えて、ひがしさまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて伊賀の判官光季といふものあり。かつかれを御勘じのよし仰せらるれば、御方に參るつは者ども押寄せたるに遁る

四月二十日、仲恭天皇の承久三年、(二八二)

帝 第八十四代順徳天皇
 春宮 第八十五代仲恭天皇
 御兄の院 第十三代土御門天皇
 父みかど 第八十二代後鳥羽天皇
 本院とぞ聞えさす
 家實 近衛基通の子、仁治三年(二八三)歿、年六十四
 道家 後京極良經の子、寛元三年(二八五)歿、年六十
 道 家 後鳥羽良經の子、寛元三年(二八五)歿、年六十
 あづまの若君 當時の鎌倉將軍、頼朝、康元年(二二二)歿、年三十九
 心づかひすべかめり
 御勘じ

時にこそあなれ

かつは

時房

北條時房、義時の弟、仁治元年（一九〇）歿、年六十六。

泰時

北條泰時、義時の長子、仁治三年（一九三）歿、年六十。

義時

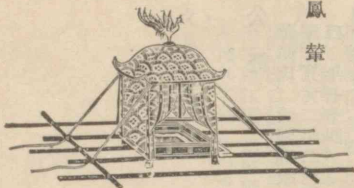
北條義時、時政の子、元仁元年（一八四）歿、年六十二。

うしろめたし

べきやうなくて腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院はお
 ぼしめしける。甚ぞん
 あづまにもいみじうあわてさわぐ。然るを さるべくで、身の失すべ
 き時にこそあなれと思ふものから、討手の攻めきたりなむ時に、
 はかなきさまにて屍を曝さらさじ。たゞの罪をなすは中せ おほやけと聞ゆとも、みづから
 したまふことならねば、かつはわが身の宿世をも見るはかりと
思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と、二人を頭として、雲霞
の兵をたなびかせて都にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう、
 「おのれをこのたび都にまゐらすことは思ふところ多し。本
 意の如く清き死にをすべし。人にうしろ見えなむには、親の顔
 また見るべからず。今をかぎりと思へ。賤しけれども義時、君
 の御爲にうしろめたき心やはある。されば横さまの死にをせ
 むことはあるべからず。心をたけくおもへ。おのれうち勝つ

心得

鳳輦



参りあへらば

ものならば、ふたゝびこの足柄箱根山は越ゆべし。」など泣く泣
 くいひきかす。「まことにしかなり。又親の顔をがまむことも
 いとあやふし。」とおもひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに
 今やかぎりとおはれに心細げなり。
 かくてうち出でぬるまたの日、おもひかけぬほどに、泰時たゞ
 ひとり鞭をあげてはせ來たり。父胸うち騒ぎて、「いかに。」と問
 ふに、「軍のあるべきやう、大かたのおきてなどをば、仰せの如くそ
 の心得待りぬ。仰せを通り心得ました もし道のほとりにも、はからざるに、かたじけ
 なく鳳輦を先立てて御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍
 らむに参りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべからむ。この
 一ことを尋ね申さむとてひとり馳せ侍りき。」といふ。泰時と
 ばかりうち案じて、かしこくも問へるをのこかな。その事なり。
 まさに君の御輿に向ひて、弓を引くことはいかがあらむ。さば

かしこまり

かりの時は兜を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身を委せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましなから、軍兵をたまはせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戦ふべし。」といひも果てぬに、いそぎ立ちにけり。

都にもおほしまうけつる事なれば、ものふども召しつどへ、

宇治勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意、心ことなり。

公經の大將ひとりのみなむ御うまごのこともさる事にて、北の公經、妻方一條中納言能保といふ人のむすめなり。その母北の方は故

大將のばらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、し

御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、又修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎつぎあまたきこゆれど、さのみは記しがたし。いくさにまじり立

公經

藤原氏、西園寺家の神、寛元二年(二六四)歿、年七十四

將軍頼經を言ふ、頼經は公經の女の出

故大將源頼朝

七條院藤原成子、後鳥羽院の御母、安貞二年(八八〇)歿、年七十二

修明門院藤原重子、順徳院の御母、文永元年(一一三三)歿、年八十三

公經

給はさめり

富士川

甲斐國(山梨縣)に發して駿河灣に入る

天龍川諏訪湖(長野縣)から出て遠江國(靜岡縣)を流れて海に入る

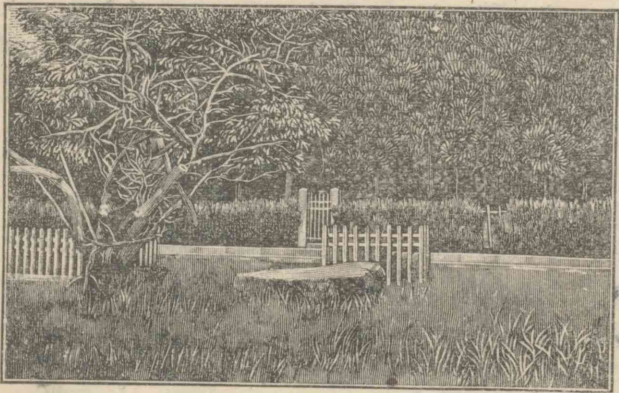
えもいはず

つ人々、このほかの玉達部にも殿上人にもあまたありき。中院はあかて位をすべり給ひしより、言にいでてこそ物したまはねど、世のいと心やましきまゝにかやうの御さわぎにも、殊にまじらひ給はさめり。新院はおなじ御心にて、よろづいくさの事なども掟ておほせられけり。

いつの年よりも五月雨はれ間なくて、富士川天龍など、えもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬もうちわたしがたければ、攻めのぼる武者どももあやしくなやめり。かゝれども、遂に都にち

かづくよしきこゆれば、君の御武者も出で立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分ちつかはす。世の中ひびきのしる

さま言の葉もおよばず、まねびがたし。こもり、遠き世界に落ちくだり、すべてやすげなく騒ぎ満ちたり。いかがあるはふかき山へ逃げ



隱岐黒木御所址

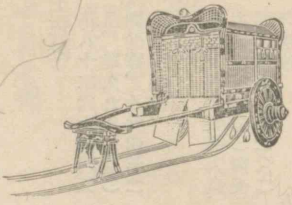
く見えし人々もまことのきはになりぬればいと心あわたし
く色を失ひたるさまどもたのもし
げなし。
六月二十日あまりにや、いくばく
の戦だになくて、つひに御方のいく
さやぶれぬ。荒磯に高潮などのさ
しくるやうにて、泰時と時房と亂れ
入りぬれば、言はむ方なくあきれて、
上下たゞ物にぞあたりまどふ。あ
づまよりいひおこするまゝに、かの
ふたりの大將軍は、からひおきてつ
つ保元のためしにや、院の上、都の外
に遷したてまつるべしときこゆれば、女院宮々所々におぼしま

どふ事さらなり。

本院は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、網代車
のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御
ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや」とおぼさる
るもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御とし四そぢに
一つ二つやあまらせ給ふらむ。まだいとをしかるべき御ほど
なり。信實朝臣召して御すがたうつしか、せらる。七條院に
たてまつらせ給はむとなり。かくて同じ十三日に、御舟にたて
まつりて、遙なる波路をしのぎおはします御心ち、この世の同じ
御身とおぼされず。いみじういかなりける代々の報にかと
うらめし。

新院も佐渡國にうつらせ給ふ。上達部殿上人それより下は
た残りなく、このことに觸れにしたぐひは重く軽く罪に當る様

鳥羽殿
城南の離宮ともいふ、
京都市伏見區下鳥羽
に舊跡がある。
網代車



あやし
ものにもがなや
とりかへす物にもが
なや世の中を、あり
しなごらのわが身と
思はむ。(源氏物語河
海抄)
いみじう……うら
めし

いみじげなり。中院は初よりしろしめさぬことなればあづまにもとがめ申さねど父の院遙かに移らせ給ひぬるにのどかにて都にあらむこといとおそれありとおぼされて御心もてその年閏十月十日土佐國畑といふ所に渡らせ給ひぬ。

六つにて位につきたまひて十三年おはしましぎ。おりたまひて後も土佐院十二年佐渡院十一年なほ天の下はおなじ事なりしかばすべて三十六年がほどこの國のあるじとして萬機のまつりごとを御心ひとつにをさめ百の官をしたがへたまへりしそのほど吹く風の草木をなびかすよりもまされる御ありさまにて遠きをあはれみ近きをなでたまふ御めぐみ雨の脚よりもしげければ津の國のこやのひまなき政をきこしめすにも難波の葦のみだれざらむことを思しき。藐姑射の山の峰の松もやうく枝をつらねて千代に八千代をかさね霞のほらの御住

土佐院
第八十三代土御門天皇、建久九年(八五〇)御受禪、承元四年(八七〇)御讓位。
佐渡院
第八十四代順徳天皇、承元四年(八五〇)御受禪、承久三年(八八二)御讓位。
津の國のこやとも人をいふべきに、隙こそなけれ葦の八重葺和泉式部。(後拾遺集)

おはしましぬへかりける一世ありく

月日をかぎりたらむだに...心ほそかるべし。まいて

後日痛
フシラシクシ

居幾春をへても空ゆく月日のかぎり知らずのどけくおはしましぬべかりける世をありく...
の都をさへ立ちわかれおのがちりく...にさすらへ磯の苦屋に軒をならべておのづからこととふものとは浦に釣するあま小舟、鹽やく煙のなびく方をわがふるさとのしるべかとはがりながめすごさせたまふ御すまひどもはそれまでと月日をかぎりたらむだにあす知らぬ世のうしろめたさにいと心ほそかるべし。まいていつをはてとかめぐりあふべきかぎりだになく、雲の浪けぶりの浪のいく重とも知らぬ境に世をつくしたまふべき御さまでも口惜しといふもおろかなり。言の類
このおはしますところは、人ばなれ里とほき島の中なり。海づらよりはすこしひき入りて、山かげにかたそで、大きやかなるいはほのそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、

ことそぐ

柴の庵
いづくにも住まれず
ばたすまであらむ
柴の庵のしばしなる
世に。西行法師(新古今集)

ゆえづく

水無瀬殿
本院の造り給うた殿
攝津國(大阪府)三島
郡島本村大字廣瀬に
あった。
二千里の外
三五夜中新月ノ色、二
千里外故人ノ心。(朗
吟集)

増鏡

十卷、著者不明。
後鳥羽天皇から後醍
醐天皇までの事蹟を
假名文で記した歴史
物語。

藤村 作

福岡縣の人、文學博
士、東京帝國大學教
授。

宗教的生活

藤村 見の形を仔細あることあり。柴のいほりのたゞしば

けしきばかりことそぎたり。まことに柴のいほりのたゞしば
しと、かりそめに見えたる御やどりなれど、さるかたになまめか
し、くゆえづくきでしなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢
のやうになむ。はるく、と見やらるる海の眺望、二千里の外も
のこりなき心ちする、今さらめきたり。しほかぜのいとこちた
く吹きくるをきこしめして、

われこそは新島もりよおきの海の

自らの生涯

同じ世にまたすみのえの月や見む

けふこそよそにおきの島守

(増鏡)

一〇 日本文學研究の新意義

藤村 作

我々日本國民に取つて、生命の糧であり力であるものは國文
學である。取出しても、盡くる事なく、一時代から次の時代
へと、絶えず我々の内的生活に糧を供してくれる寶庫は、我が二
千年來の國文學である。我々は、國文學を知り、國文學に親しむ
ことに由つて、常に日本國民たる生命を新にして行くことが出
來る、眞の日本國民として、反省と自覺との機會を與へられてゐ
る。我々は生まれて日本民族である、日本國民である。何とし
ても他の民族ではあり得ない、又他の國民ではあり得ない。そ
れは偶然に日本といふ國土に生まれたが爲ではない。日本民
族の血を引き、日本國民の生命を生命として(享)けてゐるからで
ある。血は争ふべからざるものである。血に由つてなされて

有機的結合

理想を以て世を用はし
りて、國文學の才蘊を
以て

生命の有機的結合
るる國民の結合は、無機的な結合ではない。有機的な結合に成
れる國家は、機械的な國家ではない。争ふべからざる血は、特殊
なる民族性を作り、民族精神を作り、この民族性、民族精神が有形
に又無形に國家を形成してゐる。我々は、日本民族として生く
る外に、生くべき道は見出し得ない。而して、國家に由つて、民族
共有の生命の實現に努め、民族精神を世界に擴張するを圖ること
とが、我々の個人として又國民として生くべき唯一の道である。
國民の文學は、國民の精神をさながらに寫した鏡である。か
るが故に、イギリス文學は英國國民にとつて最も尊い文學である。
フランス文學は佛國民にとつて最も大切な文學である。ドイ
ツ文學は獨國民にとつて最も愛すべき文學である。我々日本
國民にとつては、日本文學の外に世界の何處にも、より以上に尊
い大切な愛すべき文學はあり得ない。我々は、自己の生命を他

自己に冷酷な所爲
自ら備へておいた、行
道

自尊心

古典文學

(漢三條)

人のそれに比較してこれを評價するやうな、自己に冷酷な所爲
はしたくない。我が國民精神の表現である國文學を、外國文學
に比較はしても、その價値の比較には及びたくない。よしそれ
が高く評價されようと、低く評價されようと、國文學は我々日本
國民の爲には唯一のものであり、如何ともし難いものである。
我々はその本質を究め、益、これを充實せしめ展開せしめること
に努めればよい、又それより外になすべき道は持たない。我々
は、我々に生命の力を與へてくれる二千年來の歌人、物語作者、隨
筆日記の筆者、軍記物語の著者から、近世の各種様式の文藝の作
家達に、心からなる尊敬を捧げたい。そしてそれと同時に、古典
文學の筆寫、蒐集、整理、訓點、註釋、批評の業に従事して、我々に古典
文學に親しみ得べき便宜を與へてくれた國文學者達にも、同様
の敬意を保ちたい。

文學に國境は無いやうにいふ人もある。或程度までは承認さるべき事である。併し又一面から言へば、民族的國民的の血の色鮮やかなものは文學である。國語は國民の内にその職能を全うするばかりでなく、その國語を解するものには、外國人にも同様にその職能を盡くし得る。とはいへど、單語文章の持つ意味はとにかく、その中に脈打つてゐる全精神を、些の遺漏なく理解し得るものは、その國民を措いては決してあり得ない。かるが故に、イギリス文學は英國國民をして研究せしめ、フランス文學は佛國民をして研究せしめ、ドイツ文學は獨國民をして研究せしむるが、最も適當であることに論はないが、民族關係の複雑であり、國際交渉の古來久しく、國語組織の甚だ相似た西洋諸國民の間に於ては、外國人で他國文學を研究する事も妨ないかも知れない。併し、我々のやうに特殊な民族性を有し、特殊な國

家を有し、世界の國際關係から久しく隔絶されて、特殊な生活を營んで來た國民の文學系統を異にした特別な組織を持つてゐる國語に表された文學は、特に國民的の色の鮮やかなものであることは言ふまでもない。随つて我が國文學の研究は、獨り我我日本國民のみ成し得べき業ではあるまいか。³

我が國民の過去を振返つて見ると、亞細亞大陸地方から、支那や印度の先進文化を始めて我が國に輸入したのは、甚だ遠い昔のことである。その時代に於ては、我が國民はまだ素樸の状態に在つたから、彼の國の文化の燦爛たる光輝に接しては、驚異から羨望崇拜の心を向けて、熾んにこれを輸入し模倣した。内なるものを省みてよくこれを育みそだてるに遑なく、彼に學ぶ事に努めた。制度に於て、服飾家屋に於て、藝術に於て、彼の影響感化を受けた所は甚だ多かつた。學問思想文學に至るまで、追隨

鎖國序四
キリスト教傳來

酣醉

耳朶

平和な和やかな精神
本居宣長
賀茂真淵

と模擬とに力を致してゐた。これがために、當時の文化は國民の獨創力の甚しく缺乏したものとなつてゐた。かくして國家を支配した政治の實權は、貴族階級から武士階級へ移り行き、王朝時代、武士時代と時代は變り行つたが、外國崇拜の精神は絶えず續き、拜外の**迷夢**は依然として國民の間に覺めなかつた。⁴ 偶、江戸時代にいたり、徳川幕府は外國交通の道を**杜絶**したけれども、多年彼の感化を受けてゐた國民は、相變らず拜外の夢に**酣醉**を貪つてゐたが、その時代の精神の中から、ゆくりなく復古の唱道の聲が聞え出した。「古に復れ」といふ聲が、**天籟**の如く國民の**耳朶**に響いて來た。復古の精神は、昔のままの社會を再び此の地上に現さうとする精神ではない。古代の素樸な精神の中に、人間の眞精神を見出し、日本人の眞の相を見出して、それに復らうとする精神である。長い年月の間に、知らず識らず人間

本然の性

提唱

古事記傳
四十四卷、古事記を
註釋詳解した書

政治をこころを

性の眞から離れて來てゐる生活を、自覺的に本來の人間性に引き直さうとする精神である。外國他民族の感化影響の爲に、**晦**まされた民族特有の精神の發揮に、返らうとする精神である。「古に復れ」といふのは、人間**本然の性**に復れ、民族本然の相に復れといふのである。賀茂真淵は、人間の眞の精神を萬葉集に見出して、萬葉集の研究、萬葉風の和歌を**提唱**し實行した。本居宣長は、日本人の眞の相を古事記に見出して、古事記傳の著述にその生涯の大部分を捧げたのである。⁵ これ等先覺の提唱や實行に由つて、拜外の迷夢は一部破れかけたのであつたが、江戸末期に至つて、外國の要求に迫られて、已むを得ず當局は鎖國の制を撤廢して、こゝに西洋諸國との交通が開かれた。こゝに於て、西洋文化を我が國民の眼から覆うてゐた幕は切つて落されて、我が國民は再び外國文化の光に**眩惑**

されてしまつた。國際的地位を高め、國力を増進して、彼等と世界に對立するには、先づ彼等の所有するものを我に得なければならぬと知つた敏捷な我が國民は、一千餘年前の國民がなしたと同じやうに、外國文化の輸入模倣に努力した。さうして今日に於ては、最早その點では多く彼に劣るところなきまでに漕ぎつけたのである。拜外の精神は、對象を異にして又熾んに動き始めた。かくて夢から夢へと移り來つて、今なほこの夢を續けてゐる。此の夢の中に明治も大正も過ぎて、昭和の御代となつた。

世界大戦争は、いろ／＼の意味で世界の劃期的大事件であつた。此の事件に覺醒され刺戟されて起つた改造の機運は、今や世界に充滿して、各方面の改造、今現にその途上に在ると見ゆるのである。西洋文化の真相が、此の大事件に由つて遺憾なく暴

劃期的
機運

露されて、これに對する批判の眼が冷やかに輝き始めた。そして、明らかにその弱點を認識するに至つたのである。それと共に、これまで多く開去されてゐた東方文化が、世界の注視の的とならうとしてゐる。物質的から精神的へ、分析的から綜合的へと、學界の推移し行かうとする傾向が見え出して來た。數年前から西洋學者の東洋研究、日本研究に向ふ傾向はこれを語る事實である。

今や世界國際の關係、國民の交渉は、實に近く且密である。一隅を叩けば他の隅々へ直ちに響を傳へる。我が國に於ても、時を同じうして、各種改造運動と共に、古典復興、國文學研究の風潮が何處からともなく起つて來た。拜外の迷夢は先づ若い人達の中から覺めかけて來た。老年達が無自覺に拜外の鈍い空氣の中に逡巡して、舊習、舊慣の保守に固執してゐる中に、却つて若

い人達の中に自覺的な活動・思索がいろ／＼と起りかけてゐる。改造の聲の中に、外國の「束縛」を脱して、自國民の生命を擴充して行かうとする聲が聞かれる。この強い精神は、老人達の中になくて若い人達の中に聞かれる様になつた。新忠君論・新愛國運動は、若い人達を中心として起つたものではあるまいか。自國を凝視し、日本國民自身の眞の相を見出さうとしてゐる熱意は、たしかに若い人達の中に動きはじめたものである。この熱意は、少數専門學者の提唱・宣傳に基づく一時的の現象ではあるまい。それは若うして西洋文化の研究に功を積んだ人達の間にかゝる機運の動いてゐる事實に徴しても知ることが出来ると思ふ。

此の機運は、之を一言に纏めれば、復古精神の勃興である。「古に復れ」「日本國民のその元に復れ」「外國精神の束縛を脱せよ」

外國精神の束縛を脱せよ
復古精神

荷田春滿

京都稻荷社の祠官、
國學者、元文元年(三三
六)歿、年六十九。

平田篤胤

羽後國(秋田縣)の人、
宣長の門人、天保十
四年(三五三)歿、年六
十八。

といふ精神である。荷田春滿や賀茂眞淵が二百年前に唱へ出して、本居宣長や平田篤胤等に繼承されて、大いに國民を警醒し、明治維新の大業を成就した根本を培養した精神と同様の精神である。それが今こゝに又繰返されてゐるものといへる。江戸時代の復古主義者には、世界知識の狭かつた爲に「固陋な偏見」に捉へられた弊があつた。今日の復古精神には、此の如きものを含んでほならない。復古精神は、舊い昔の社會や生活をさながらに今日に移さうといふのではない。古代生活や古代文化の中に見出される人間の眞の精神、日本國民の眞の相に復歸しようとする精神であらねばならない。因襲の世界から本然の世界へ「いびつ」の世界から正しき世界へ、虚偽の世界から眞實の世界へ復らうとする精神であらねばならない。而して、かゝる人間の眞の精神、日本國民の眞の相は、これを古典文學の世界に

因襲の世界
物作り出入動機
フ因

見出すべく、本然の世界正しき世界眞實の世界はこれを文學の中に見出すべきであるから、復古精神には古典への憧憬、國文學探究の精神の伴ふを常とするのである。

斯様にして、復古精神の勃興、古典復興の新現象に促されて、國文學の眞の光が次第に世に出てつゝあるの事實を見るのではあるが、なほ我々學徒の爲に残された未開墾の荒蕪地も少くないし、新考察、新研究に遺された餘地は極めて多いのである。獨り學者研究の餘地が多く遺されてゐるばかりでなく、民衆理解には更に多くの餘地の存することを思ふのである。専門學者の努力は、その方に向つても前途遼遠の感を免れないのである。

(日本文學講座)

日本文學
新研究

道長の讚美物語

二 法成寺の造營

法成寺造營

御堂

法成寺、寛仁三年二月、藤原道長の創建、址は今の京都御所の東隣。

攝政殿

藤原頼通、道長の子。

殿

藤原道長。

叶ふべきなほめり

心許なし

侍り遠し

頼りなき

なべてのさまにやはおはします

馬道

今は御心地列さまになり果てさせ給ひぬれば、御堂のこと思し急がせ給ふ。攝政殿國々迄さるべき公事をばさるものにて、

まづこの御堂の事を先につかうまつるべき仰せ言のたまふ。

殿の御前もこのたび生きたるは別事ならず、この願の叶ふべき

なめりとのたまはせて、他事なくたゞ御堂におはします。方四

町をこめて大垣にして瓦葺きたり。さま／＼に思しおきて急

がせ給へば、夜の明くるも心許なく、日の暮るゝも口惜しう思さ

れて、夜もすがらは山を疊むべきやう池を掘るべきやう、木を栽

ゑなめさせざるべき御堂々々、方々様々造り續け、御佛はなほ

のさまにやはおはします。六の金色の佛を、數もしらす作りな

め、そなたをば北南と馬道をあけて、道を整へ造らせ給ひて、廊渡

安きいも大殿ごも
らす

租庸徭

地子・官物

殿かずおほく作らせなんど思し給ふに鶏の鳴くも久しく思され、宵曉の御行も怠らず安きいも大殿ごもらす、唯この御堂の事のみ深く御心にしませ給へり。日々に多くの人々参りたりし、^{雑聞知りました}立ちこむ。さるべき殿ばらをはじめ奉りて宮々の御封御荘と
もより、一日に五六百人千人の夫どもを奉るにも、人の數おほか
ることをばがしこきことに思したち國々の守ども、地子官物は
おそなはれども、只今はこの御堂の夫役材木檜皮瓦など多く参
らすることを、我もくと競ひつかうまつる。おほかた近きも
遠きも参りこみて品々方々あたりにつかうまつる。
あるところを見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ば
かり並みゐてつかうまつる。同じくはこれこそめでたけれと
見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のぼりゐて、大
きな木どもには大綱をつけて、聲を合はせてえさまさと引き

木賊



椋の木



樽
大津・梅津

大津は近江國（滋賀縣、梅津は山城國（京都府）共に材木の集散地。

西は東

西、梅津、東、大津で、東西同じの意。

須達長者
佛在世時の舍衛國の富者

作りけむ…あり
けむ

上げさわぐ。御堂の内を見れば、佛の御座作りかゞやかす。板敷を見れば、木賊、椋の葉などして、四五十人手毎に並みゐてみかき拭ふ。檜皮葺壁塗瓦作なども敷をつくしたり。また、老いたる翁などの、三尺ばかりなる石を、心にまかせて切りと、のふるものあり。池を掘るとて四五百人おりたち、山をたゝむとて五百人のぼりたち、又、大路の方を見れば、力車に、えもいはぬ大木どもに綱をつけて、叫びの、しりて引きもてのぼる。鴨川の方を見れば、筏といふものに、樽、材木を入れて、棹さして心地よげに、諸ひの、しりて上るめり。大津、梅津の心地するも、西は東といふことは、これなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて、來れどしづまず。すべて色々様々いひつくし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍作りけむも、かくやありけむと見ゆるを、冬の室夏の殿おのゝことごと

冬の室
 淨飯王太子ノ爲ニ三時殿ヲ作ル、一ハ暖殿、以テ隆冬ニ擬ス、第二涼殿、夏暑ニ擬ス、其ノ三殿ハ春秋二時ノ寢息ニ擬ス、(佛本行集經)
 勝らせ給へり
 と見えさせ給ふに...

天王寺

攝津國(大阪府)四天王寺

王城より

法成寺は宮城の東にある。

とこそは、給ふなれ

榮華物語

四十一卷、著者不明、宇多天皇から堀河天皇に至る。凡そ二百餘年間の雜史。

となり。かゝる御勢にそへて、入道せさせ給ひて後は、いと勝らせ給へりと見えさせ給ふにも、猶なべてならざりける御有様かなと、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は遙かに拜み参らす。今はこの御堂のあたりの本草ともならむと思へる人のみ多かり。そなたさまに赴けば、海の浪もやはらかにたちて、この御堂のものを持て運ばせ、河も水すみて、快く浮かべもて参ると見ゆ。なほなべてこの世の事とは見えさせ給はず。まづは、先年に長谷寺にある僧の、御祈禱をいみじうして、寝たりける夢に、大きにいかめしき男の出で来て、何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の、佛法興隆のために生まれ給へるなり。」とぞ見えさせ給ひける。また、天王寺の聖徳太子の御日記には、王城より東に佛法弘めむ人を我と知れ。」とこそは書きおかせ給ふなれ。いづれにてもおろそかならぬ御事なり。(榮華物語)

此衣部藤原爲時
 の振り、中四巻

心盡くしの秋風

木の間より漏りくる月のかげ見れば、心盡くしの秋は来にけり。讀人不知(古今集)

關吹き越ゆる云々

旅人は秋涼しくなりけり。關吹き越ゆる須磨の浦風。在原行平。(續古今集)

枕浮くばかり

ひとり寝の床にたまれる涙には、石のまらもらもきぬべらなり。古今六帖

枕を歎く

耳を澄ませ南なり

海なる

辨(なり)

二三 須磨の秋風

一 關

源氏の名、海邊寺所

須磨には、いと心盡くしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、關吹き越ゆるといひけむ浦波、よるくはげにいと近く聞えて、又なく哀なるものは、かゝる所の秋なりけり。御前にと人少なにて、うち休み渡れるに、一人目を覺まして、枕を歎いて四方の嵐を聞き給ふに、波たはた此處もどけたち來る心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりけり。琴を少しかき鳴らし給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、弾きさせ給ひて、戀ひわびて泣く音に、まがふ浦波は、いかに思ふかたより風や吹くらむ。とらたひ給へるに、人々おどろきて、めたる覺ゆるに、忍ばれで、あいなげ起き居つゝ、鼻を忍びやかにかみわたす。

源氏物語の想像

源氏物語の想像

人々の語り聞えし
海山
源氏わらはやみにて
北山に詣でた時、人
人國々の勝景を語り
聞えた。(源氏物語若
紫の巻)
干枝
姓不詳
常則
飛鳥部常則、古今著
聞集に繪に巧であつ
た事が出てある。

げに如何に思ふらむ。我が身一つにより、親兄弟片時たち離
れ難く、程はつけつゝ思ふらむ家を別れてかく惑ひあへると思
すに、いみじくてもとかく思ひ沈む様を、心細しと思ふらむと思
せば、晝は何くれとたはぶれごと打宣ひ紛らはしづれなる
儘に、いろ／＼の紙をつぎつゝ、手習をし給ひ、珍らしきさまなる
唐の綾などに、さまざまの繪どもをかきすさひ給へる屏風のお
もてどもなど、いとめてたく見所あり。人々の語り聞えし海山
の有様を、遙かに思しやりしを御目に近くては、げに及ばぬ磯の
たゞすまひになくかき集め給へり。「此の頃の上手にすめる干
枝常則などを召して、作繪仕うまつらせばや」と心もとながり
あへり。なつかしうめてたき御有様に、世の物思ひ忘れて、近う
馴れ仕う奉るを嬉しき事にて、四五人ばかりぞつと侍ひける。
前栽の花いろ／＼咲き亂れおもしろき夕暮に、海見やらるる廊



(筆起光佐土) 風秋の磨須

ゆきしつ浦をなす
なよゝか

紫苑色

藤紫

年返りて

源氏二十七歳

南殿

紫宸殿

一年の花の宴
源氏院内の御前で面
目を施した(源氏物
語花宴の巻)

院

桐壺院

うちの上

代
朱雀天皇、第六十一
櫻かざしし云々

もゝしきの大宮人は
いとまあれや、櫻か
ざして今日も暮しつ。
山邊赤人。(新古今集)

に出で給ひて、たゞみ給ふ御さまのゆゑしう清らなるにとこ
ろがらはましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよ
よかなる紫苑色など奉りて、ごまやかなる御直衣帯しどけなく
うち亂れ給へる御さまにて、「釋迦牟尼佛弟子」と名のりて、ゆる
かによみ給へる、また世に知らず聞ゆ。

年返りて、日長く徒然なるに、植ゑし若木の櫻、ほのかに咲きそ
めて、空の氣色うらゝかなるに、よろづの事思し出でられて、うち
泣き給ふ折々多かり。二月二十日餘り、いにし年、京を別れし時、
心苦しかりし人々の御有様などいと戀しく、南殿の櫻は盛りに
なりぬらむ、一年の花の宴に、院の御氣色、うちの上のいと清らに
なまめいて、我が作れる句を誦じ給ひしも思ひ出で聞え給ふ。

いつとなく大宮人の戀しきに
櫻かざしし今日も來にけり

大殿の三位中將
源氏の故北方葵上の
兄君。

源氏を
訪れ

一つ涙ぞ云々
嬉しきも憂きも心は
一つにて、別れのも
のは涙なりけり。讀
人不知(後撰集)

ゆるし色 許色
右衛門尉の紅葉紫
多きまき色し道
加用侍の色
笑まれて
三十一
源氏 白下里

いと徒然なるに大殿の三位中將は、今は宰相になりて、人から
のいとよければ時世の覺え重く、物し給へど、世の中いと哀れ
に味氣なく、物の折ごとに戀しく覺え給へば、事の聞えありて罪
に當るとも、如何はせむと思しなりて、俄にまうで給ふ。打見る
より珍らしく嬉しきにも、一つ涙ぞこぼれける。住ひ給へるさ
まいはん方なく唐めきたり。一所のさま繪にかきたらむやうな
るに、竹編める垣し渡して、石の階松の柱おるそかなるものから
珍らかにをかき。山賤めきて、ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の
衣指貫打圍れて、ことさらに田舎びてもてなし給へるしも、い
みじう見るに笑まれて清らなり。
取使ひ給へる調度も、假初にしなして、御座所もあらはに見入
れらる。碁雙六の盤調度、彈碁の具など、田舎わざにしなして、念
誦の具行ひ勤め給ひけりと見えたり。物參れるなど、ことさら

かひつ物

御水

飛鳥井 水
飛鳥井に宿りはすべ
しかけもよし、みも
ひも寒し、みまきも
よし。(催馬樂)馬守の
若君 馬守の
源氏の長子夕霧、
大臣、オトド
宰相中將の父源氏の
舅。

泣きみ笑ひみ
酔の悲みの云々
酔、泪ヲ灑グ春盃ノ
裏、吟苦願ヲ支フ曉
燭ノ前。(白氏文集一
六別三元微之於邊上
詩)

所につけ、興ありてしなしたり。海人ども、
て參れるを召し出でて御覽ず。浦に年經る様など、問はせ給ふ
に、さま、安げなき身の愁ひを申す。そこはかとなく、
心の行方は同じ事なるかなと哀に見給ふ。御衣ども、
せ給ふを生けるかひありと思へり。
御馬ども、近う立てて見やりなる倉か何ぞなる、稻ども取出て
て飼ふなど、珍らしう見給ふ。飛鳥井少し、
泣きみ笑ひみ若君の何とも世を思さず、物し給ふ悲しさを、
の明け暮れにつけて思し、嘆くなど語り給ふに、堪へ難く思した
り。盡きすべくもあらねば、片端もえまねば、
まどろまず、文作り明し給ふ。さいひながら、物の聞えをつ
みて、急ぎ歸り給ふ。いと、
しみの涙、
と、諸聲に、
御供の人ど

惜しむべかんべ
かるべあり

今日なむ...給ふ
べき

巳の日

上巳の節供

軟障

堂上にも堂下にも用
ひる、表は生絹で唐
繪をかき裏はねり絹
縁もねり絹の幕であ
る、縦三尺七寸横六
寸、一巾は約一尺、
それに紫の縁がつき、
十程の乳のあるもの
である。



も皆涙を流す。おのがじしはつかなる別れ惜しむべかんべり。

朝ぼらけの空に雁つれて渡る。主人の君、かりかぬりかん
ふる里を何れの春か行きて見む

うらやましきは歸るかりがね

宰相更へに立ち出でむ心地せて、

飽あかなくにかりの常世とこよを立ちわかれ

花のみやこに道や惑はむ

さるべき都のつとなどよしある様にてあり。

三月の朔日しつげつに出で來たる日ひ、今日なむ、かく思す事ある人
は、禊みそぎし給ふべき」となまざかしき人の聞ゆれば海面も床しく

て出で給ふ。いと疏ゆるに軟障なんじょうばかりを引廻ひきまわらして、此の國に通ひ

ける陰陽師いんりやうし召よして、祓はらせさせ給ふ。船ふねにことごとくしき人形載のせ
て流すを見給ふにも、よそへられて、

知らざりし大海の原に流れ來て

ひとかたにやは物は悲しき

とて居給へるさま、さる晴に出でて言ふよしなく見え給ふ。海

の面はうらくと風ぎ渡りて、行方も知らぬに、來し方行く先思
しつゞけられて、

八百萬神も哀れと思ふらむ

犯せる罪のそれとなければ

と宣ふに、俄に風吹き出でて空もかきくれぬ。御祓もしはてず、

立騒たふさぎたり。脇笠雨わきかさとか降り來て、いとあわたしければ、皆歸

り給はむとするに、笠も取りあへず。さる心もなきに、よろづ吹

き散らし、又なき風なり。波いと厳しう立ち來て、人々の足を空
なり。海の面は袈けを張りたらむやうに光り満ちて、神鳴り閃め
く。落ちかゝる心地して辛うじて辿り來て、かゝる目は見ずも

來し方

雨降る以前に風が起る
を常とす

はらめき落つ

といふものになむ
害はるると

宮
離宮をさす

源氏物語
五十四帖、一條天皇
の時(六十一)空二紫
式部の著した小説
紫式部―藤原爲時の
女上東門院に住ぶ、
生没年不明

あるかな。風などは吹けど、氣色づきてこそあれ、浅ましう珍ら
かなり。」と惑ふに、なほやまず鳴りみちて、雨の脚當る所通りぬ
べく、はらめき落つ。かくて世は盡きぬるにやと、心細く思ひ惑
ふに、君は長閑やかに經打誦じておはす。

暮れぬれば、かみ少し鳴りやみて、風ぞ夜も吹く。多く立てつ
る願の力なるべし。「今暫しかくだにあらは浪に引かれて入り
ぬべかりけり。高潮といふものになむとりあへず人害はるる
とは聞けど、いとかわる事は、まだ知らず。」といひあへり。

曉方皆うち休みたり。君も聊か寝入り給へれば、そのさまと
も見えぬ人來て、など宮より召しあるに、海神は參り給はぬ。
りありくと見るに驚きて、さは海の中の龍王の、いといたう物め
でするものにて、見入れたるなりけりと思すに、いと物むつかし
引、この住ひ堪へ難く思しなりぬ。
(源氏物語)

一三 謠ひもの

一期 詠

祝

嘉辰令月歡無極、萬歲千秋樂未央。

謝 偃

長生殿裏春秋富、不老門前日月遲。

保胤

讀人知らず

わが君は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて
苔のむすまで

早春

氣霽風梳新柳髮、氷消浪洗舊苔鬚。

都良香

志貴皇子

いはそぐ垂氷の上の早蕨の萌えいづる春になり
けるかな

祝

嘉辰令月歎無極万歳千株樂未央

謝偃

長生殿裏春秋富不老門前日月遲

保胤

わさよみはらさるやもよみにまれい
しれいもほとなりてふのむすもえ

倭漢朗詠集抄寫

山家

紀齊名

山路日暮滿耳者樵歌收笛之聲

澗戸鳥歸遮眼者竹煙

松霧之色

讀人知らず

山里は物のさびしきことこそあれ世のうきよりは住
みよかりけり

二 今 様

萬劫年ふる

萬劫年ふる龜山の

下の泉のふかければ

苔むす岩屋に松生ひて

梢に鶴こそ遊ぶなれ

一 天 四 海

治り靡く時なれや

一天四海のうちのみか

人の國まで日の本の

唐土が原もこのところ

佐佐木信綱
三重縣の人、明治五
年生、歌人、文學博
士。
簡素

一四 萬葉集序説

佐佐木信綱

古來、歌集は多いけれども、その想の純眞簡素のうち、人心の基調を傳へて、さながら歌の故郷ともいふべく、詩歌の不朽の生命の源泉を爲せるものは萬葉集である。

萬葉集といふ名の起りに就いては、萬の世といふ説と、萬の言の葉といふ説と二つある。いづれも當時流行した文選淮南子等の漢籍中の文字に出たものとされる。兩説のうち、萬の世の方が支那にも日本にも多く用ひられてゐるので、その方に左袒せられる。なほいま一説には、多くの木の葉の義で、多くの歌を集めた譬喩に用ひたものといふ説がある。

これを選んだのは橘諸兄とも、諸兄及び大伴家持ともいひ、更

文選
三十卷、梁の蕭統撰
文章詩賦を蒐む。
淮南子
二十一卷、漢の淮南
王劉安の撰。
左袒

君民一体文化、
敏達崇う表へス

雜歌
泊瀬朝倉宮御宇大
泊瀬幼武天皇御製
歌一首
暮去者小椋山爾時鹿
之今夜者不鳴寤家良
霜
ゆふさればをくらの
やまになくしかのこ
よひはなかずいねに
けらしも
或本ニ岡本天皇御
製不審正指因以異
載岡本天皇幸紀伊
國時歌二首

に家持の私選といひ、諸説あるが、吾人の考では、全部が一人の手によつて選ばれたものではなく、數種の集の草稿類があるところ(大伴家ならむ)にあつめられ、其のまゝ一部の書として傳つたものであらうと思はれる。

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇大泊瀬幼武天皇
御製歌一首
暮去者小椋山爾時鹿
之今夜者不鳴寤家良
霜
ゆふさればをくらの
やまになくしかのこ
よひはなかずいねに
けらしも
或本ニ岡本天皇御
製不審正指因以異
載岡本天皇幸紀伊
國時歌二首

(本紙藍) 本寫の集葉萬

併し草稿のまゝで精選してないといふ事が、歌集であるだけに、少しの障りも無いのみならず、却つて當時のいろいろの歌風が窺はれて面白のである。萬葉集が精選

を経ずに傳つたのは、寧ろ吾人の幸福である。草稿だけに、その體裁も卷によつて或は整ひ、或は整つて居らぬ。卷數二十卷、分類した卷には、雜歌相聞、挽歌譬喩、四季雜歌等の目がある。

四九四詩

旋頭歌

歌體からいへば長歌二百六十二首、短歌四千百七十三首、旋頭歌六十一首となる。長歌、旋頭歌がかく多くあるのは、此の集の特色である。

時代は奈良朝、更に詳しくは藤原朝、持統文武——二十三年間、奈良朝、元明以後、淳仁に至る——四十八年間、合計約七十一年間を代表し、集中の歌は概ね其の間の作で、而も短い藤原朝の間の作は、長い奈良朝の間の歌に比して数が少からぬやうに思はれる。併し一々の歌に就いては、持統以前の作もかなり有り、最も古くは仁徳、允恭、雄略帝時代の作もある。

作者は其の名の知られたものと知られないものと相半ばし、知られたものに就いて見るに、上は帝王、皇后、皇族、大官より、下は庶人に至るあらゆる階級の人を含んでゐる。これまた後代の勅撰集に見ぬ此の集の特色である。

其のうたはれた題材から見ると、地理的に言へば、北海道を除いて殆ど日本全國にわたつてゐる。大和をはじめ、近畿を中心として、東海、東山、西海、北陸、南海、山陽、山陰、諸道の諸國の地名、風土はすべてうたはれてゐる。品物的に言ふと、鳥獸、魚介、草木の類から器材、服食に至る迄すべて取扱はれてゐる。これだけでも萬葉集の歌が當時の人々の日常生活のすべてと交渉して居た事がわかる。それで後世の歌に見る様な特別の歌題と言ふものが未だ無かつたので、其の歌は孰れも當時の人々の實際の經驗と交渉して居る。要するに歌と言へば、特殊の人士が、花鳥風月の風流とか名所とか、又一定の題目とかによつて、想を構へたものとなつて了つた後世の狭い題詠とはまるで違つてゐる。それだけに歌として見て、到底後の歌に見得べからざる面白みがある。

次に萬葉集の奈良朝文化に於ける位置に就いて考へて見よ
う。

そもく、奈良朝といふのは、今更言ふまでもなく、我が國の文化史上の黄金時代もとよりその文化は専ら帝都に限られてゐて、範圍の狭いものであつたが、而して丁度現今の我が國が、歐米諸國の文化を採り入れて立派な發達をしてゐるやうに、當時はその頃隆盛の域にあつた支那の文明を採り入れて、光彩まばゆい有様を呈してゐた時代であつた。

この奈良朝の文化が、後代にのこしたほとんど不滅の事業として、萬世に傳へなければならぬものがある。これは一般の文化が進歩した後代、もしくは今後に於ても、永久にその光彩を失はぬのであらうと思はれる。それは何であるか。即ち當時の美術と文學とである。而して文學とは、即ちこの萬葉集の歌で

神往の感

ある。

奈良に遊んで、千年の風雨に堪へて今なほ當時の偉觀を忍ばしめるところの幾多の建築物、彫刻物を觀た人は、我等の祖先が、上世に有した立派な文化にまのあたり接して、一種神往の感に打たれざるを得ぬであらう。而してかの薬師寺の建築彫刻、東大寺の大佛、三月堂の諸像等が出來たと同時代に、萬葉集が生まれたのである。萬葉集の作者も、彼等美術家も、共に同時代の人である。彼等によつて實に奈良朝文化は創り出されたのである。しかも更に萬葉集の作者と、彼等美術家とが、それく、奈良朝文化について有する位地と意義とを考へると、大いに異なるものがある。蓋し、彼等美術家達が、國民中の少數者たる天才であり、しかも多くは三韓支那の歸化人、もしくはその子孫であつたのに、彼等萬葉の作者は當時の國民一般であつたといふこと

である。この點に於て、吾人は萬葉集によつて當時の我が日本國民の感情といひ、氣力といひ、知識といひ、道義的觀念といひ、即ち國民性てふものを、血と肉とに於て感ずることが出来るのである。しかも、或はその美しさに於て、或はその雄々しさに於て、或はその敏さに於て、或はその敦厚といふ事に於て、我が上代人の國民性は歴史上大いに貴しとすべきものであつた。この事は、實に吾人が萬葉集によつて知り得るところであると同時に、その故を以て、萬葉集は實にかの諸美術品にもまして、一層貴重なる人間の創作たるを得るのである。萬葉集を有するのは實に我等國民の誇である。

(増訂萬葉集選釋)

一五 畝傍の山

長歌

近江の荒都を過ぐる時

柿本人麿

玉だすき	畝火の山の	榎原の	ひじりの御世ゆ
生れましし	神のことく	樛の木	いやつぎくに
天の下	しろしめししを	空に見つ	大和をおきて
青丹よし	なら山を越え	いかさまに	おもほしめせか
天ぞかる	鄙にはあれど	いはばしの	近江の國の
さゝ波の	大津の宮に	天の下	しろしめしけむ
すめろぎの	神のみことの	大宮は	こゝと聞けども

大殿は こゝといへども 春草の 茂く生ひたる
霞たつ 春日のきれる 百敷の 大宮どころ
見ればかなしも

反歌

さゝ波の志賀の辛崎さきくあれど大宮人の船まちかね
つ

不盡山を望みて

山部 赤人

天地の わかれしときゆ 神さびて 高く貴き
駿河なる 不盡の高嶺を 天の原 ふりさけ見れば
わたる日の かげもかくろひ 照る月の 光も見えず
白雲も いゆきはゞかり 時じくぞ 雪はふりける

語りつき

言ひつきゆかむ 不盡の高嶺は

反歌

田兒の浦ゆうち出でて見ればましろにぞ不盡のたかね
に雪は降りける

子等を思ふ歌一首

山上 憶良

瓜食めば 兒ども思ほゆ 栗食めば まして忍ばゆ
何處より 來りしものぞ まなかひに もとなかゝりて
やすいしなさぬ

反歌

しろがねも黄金も玉も何せむにまされるたから子にし
かめやも

短歌

天智天皇

わたつみの豊旗雲に入日さしこよひの月夜あきらけくこそ

湯原王

吉野なる夏實の川のかはよどに鴨ぞ鳴くなる山かげにして

額田王

熟田津に船乗せむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

柿本人麿

あしびきの山川の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に雲たちわたる

小野老

青丹よし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今盛りなり

山部赤人

み吉野の象山のまの木ぬれにはこゝだもさわぐ鳥の聲かも

大伴家持

わが宿のいさゝ群竹吹く風の音のかそけきこのゆふべかも

海犬養岡麿

み民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば

一六 倭 建 命

天皇
景行天皇、第十二代
御子
日本武尊
小碓命
日本武尊の御名
まつろふ

こゝに天皇その御子小碓命に詔りたまはく、西の方に熊襲建二人あり。これ伏はず、禮なき人どもなり。かれその人どもを取れ。」とのりたまひて遣しき。此の時にあたりてその御髪額に結はせり。こゝに小碓命その姨倭姫命の御衣御裳を賜はり、劍を御懷に納れて幸しき。

かれ熊襲建が家に到りて見たまへば、その家の邊に軍三重に圍み、室を作りて居りける。こゝに「新室樂せむ」と言ひ動みて、食し物を設け備へたりき。かれその傍を遊行きてその樂する日待ち給ひき。こゝにその樂の日になりて、その結はせる御髪を童女の髪のごとけづりたれ、その姨の御衣御裳を服して、すでに童女の姿になりて、女人どもの中に交りたちて、その室の内

な……そ
纏向之日代の宮
大和國(奈良縣)磯城
郡纏向村に在つた景
行天皇の宮殿



日 本 武 尊 尊

に入りおましき。こゝに熊襲建兄弟二人、その嬢子を見めてて己が中に坐せて、盛りには樂げたり。かれその酣なるときにいたりて、御懷より劍を出して、熊襲が衣の衿を取りて、劍もてその胸より刺し通し給ふ時に、その弟建見畏みて逃げ出でき。乃ちその室の椅の本に追ひ至りて、その背を取らへて、劍もて尻より刺し通したまふ。こゝにその熊襲建まをしつらく、その御刀な動かし給ひそ。僕申すべき事あり。」とまをす。かれ暫し許しておし伏せたまふ。ここにまをす。汝が命は誰にますぞ。」吾は纏向之日代の宮にまし

大帶日子淤斯呂和氣天皇
景行天皇

甜瓜

大八島國知ろしめす大帶日子淤斯呂和氣の天皇の御子、
名は倭男具那の王にます。おれ熊襲建二人伏はず禮なしとき
こしめして、「おれをとれ」とみことのらして遣せり。」と詔りたま
ひき。こゝにその熊襲建、信にしかまさむ。西の方に吾二人を
除きて、建く強き人無し。然るに大倭の國に、吾二人にまして建
き男は坐しけり。こゝを以て吾御名を獻らむ。今より後倭建
の御子と稱へまをすべし。」とまをしき。この事まをし訖へつ
れば即ち熟瓜のこと、振り柝きて殺し給へき。かれその時より
ぞ御名を稱へて倭建の命とまをしける。

(古事記)

古事記
三卷、元明天皇の和
銅五年(二七三)正月二
十八日太安萬侶が撰
録した歴史書。
太安萬侶(神武天皇
の皇子神八井耳命の
子孫、養老七年(二
三)歿、年不明。

阿部次郎
山形縣の人、明治十
六年生、文學博士、
東北帝國大學教授。

一七 生活の中心

阿部次郎

自分はすべての人に勧めるに、その生活の中心をこしらへる
ことを以てしたい。その中心を中心として、日々の生活を調整
することを以てしたい。もしその中心を発見することが容易
でないならば、自分は生活の中心を求めることを以て、それまで
の生活の中心とすることを勧めたい。

諸君が學校にある間は、學校の課程が、外部的ながら、諸君の生
活に一種の中心を與へてゐる。諸君は、諸君の生活を調整すべ
き具體的秩序を手近に持つてゐる。

随つて、たとひ學校をつまらないものと見る人々でも、なほこ
れによつて、自分の生活に一種の具體的内容の與へられてゐる
ことは、争ふことはできないであらう。しかし、諸君が學校を卒

業して、授業時間や、課題や、練習や、試験の束縛を脱れる時、諸君はまた一方に、何となく日々の生活に具體的内容を缺いて、退屈と空虚を覺えることを禁じ得ないであらう。學校に代つて諸君の生活の中心となるものが、直ちには諸君の手に落ちて來ないであらう。多くの人は、學校を卒業すると共に、何かをしなければならぬ義務を他人から負はされるか、もしくは自らの感情の中に負ふを常とする。しかし、今日の社會は、我等の卒業を待ち受けてゐて、直ちに我等に適當な活動の地を與へるやうな社會ではない。さうして、自ら活動の地を造り出さうとするにも、我等は自己の内面に確さの自信を缺き、我等の働きかけるべき社會に對する適當の知識を缺いてゐるが故に、内外兩様の意味に於て、どこから手をつけていゝかわからなくなる。かくて、焦躁と、空虚と、この二つの相反したやうで相近似した感情は、手を携

へて我等の生活に迫つて來る。さうして、我等はあせればあせるほど、益、生活の中心を失つた感じに捉はれなければならぬ。自分は、學校を卒業すると、直ちにこの病に捉はれて、學校卒業後の二三年は、まるで何事も手につかなかつた。さうして、この状態を脱却するまでには、自分としては堪へ難いほどの忍耐と節制とを積まなければならなかつた。故に自分は、諸君の卒業を送るに當つても、特にこの點に關する注意を請はなければならぬ。

凡そ人生は短く、人生は長い。爲すべきものを持つてゐるものには、六七十年の歲月は須臾にして流れ去るであらう。しかし、何事にも倦んだ心に取つては、五十年の壽命も、長い退屈な旅と思はれるに違ひないのである。さうして、この短い生涯を空過しないためにも、この長い一生を退屈せず暮すためにも、我

等には生活の中心が必要である。自分は、中心を缺いた生活の中に
ある充實と幸福とを考へることができない。

そこで我等の問題は、更に一步を進めて、いかにして生活の中心を
発見すべきかといふことに移る。この問題に對する解答も、また固より容易
ではないが、自分には、その具體的方法として一つの考案がある。

といつても、それは何も珍らしいことではない。最も自分に
適しさうな人を選んで、その人の内面的發展を精細に跡付け、その通つた
道を自分も内面的に通つて見ることである。約言すれば、自らそれの「師」
を擇んで、自己の鍛鍊をその「師」に託することである。師の奴隸とならずに、
しかも、師を信賴して、常に「師」に照らして、自己を發見する途を進むこと
である。

自分は自分たちの受けて來た纏まりのない教育と、いたづら

飯山

長野縣下水内郡飯山町

白隠和尚

駿河國(靜岡縣)の人、
黃檗宗の高僧、明和五年(一八一七)寂、年八十四。

高社

長野縣下高井郡飯山町の南

に漠然とした廣い知識とをおもふ毎に、古人の受けた鍛鍊と訓育とを羨ましいと思ふ。自分はこの春、信濃の飯山に行つて、白隠和尚修業の地なる正受庵を訪うた。庵は高社たかやしろの山を望み、千曲川を望む小丘の上にあつて、杉の老樹の生ひ繁つた幽邃な境にある。初め白隠が惠端和尚をこの庵に訪うた時、惠端は白隠を崖から蹴落したさうだ。白隠はそれにも懲りずに、惠端に師事したさうだ。さうして、或日白隠が一つの悟を得て、その坐禪の座から(彼は戸外の石上に坐して工夫を積んだといふことである)歸つて來るときに、惠端は縁の端に出て、遠くから手招きをしなが、白隠を歓迎したさうだ。

自分はその話を聞いて、白隠と惠端との間が羨ましくてならなかつた。自分にも、自分を崖から蹴落してくれる師匠、縁側から自分を手招きしてくれる師匠があたら、どんなに幸福なこと

であらう。師弟とは、與へられるだけ與へ、受けられるだけ受けんとする、二個の獨立せる、しかも相互にふかく信賴せる靈魂の關係である。弟子をその個性のまゝに一人の「人」とするところに、師の師たる所以があり、その稟性に隨つて、一個の獨立せる人格となるところに、弟子のもつとも多くその師に負ふ所以がある。「道」の傳統は、何等かの意味に於ける師弟の關係を経て、始めて内面的に生きるのである。

固より、師に就くことは、自分の生活内容を、その師の供給に仰ぐといふことではない。我等が愛し、憎み、努め、怒る心は、我等が我等自身の中に豫め持つてゐなければならぬところである。これ等の愛憎や、喜悲は、我等の生活を刻々に新たな境涯に漂はしめ、往々にして、我等の生涯を困惑と、壅塞と、彷徨と、昏迷との境に導く。この窮境を拓き、この關門を透過する努力に於て、我等は

昏 壅
迷 塞

始めて「師」の忠言を必要とするに至るのである。我等が師に就いて學ぶべきところは、問題の解き方である。途の切り拓き方である。生活内容を流れ行かすむべき方向である。もし我等自身の中に、豫め生活内容を有することなく、一定の傾向を有することなく、解決を要する問題を有することがないならば、師に就くことは、全然無意味でなければならぬ。故に生活の中心を求め、古人の著作を研究するといふ時、我等の生活の意味は、讀書にあるのではなく、我等の内面的知覺を開拓して、これを正しい方向に導いて行くところにあることは、繰返すまでもないことである。書を読むことは、自ら生きることと停止することを意味するならば、また他人の著作を研究することは、自ら省みる事を中斷することを意味するならば、我等は固よりいかなる場合にも、書を読むことを、他人の思想を研究すること

第一義諦

を、生活の中心とすべきではない。こゝに讀書といひ、研究といひ、師に就くといふのは、自ら生き、自ら省みる爲の一つの途を意味するものであることは、明瞭に記憶して置く必要がある。我等が師に就いて學ぶことを要する第一義諦は、行住坐臥に師の言葉を讀誦することではなくて、何よりもまづ、師と同一の勇氣を以て、人生に衝き當ることとでなければならぬ。自己の直接經驗を基礎として、人生の疑に觸れ、人生の疑を解く途を求めることとでなければならぬ。

自分は今最も自分に適しさうな人を選んで、これを師とすべきことをいつた。しかし、こゝに「最も自分に適する」といふのは、現在の自分が最も愛好するもの、現在の自分が最も親しみ易いもの、——換言すれば、現在の自分の程度を以ても、容易に接近し得べきものといふ意味ではないのである。此の如き師は、たゞ

偏局

我等をあまやかすもの、現在に於ける我等の偏局した發展を、更に一面的に偏局せしめるものに過ぎないであらう。現在の自分は、自分の本質の一切ではない。我等の本質の中には、無限の可能性がある。他日、我等の本質の中から、現在の自分には思ひも寄らぬ花が咲き出る日がないことを、誰か保證することができよう。我等の「師」は、我等の本質の中から、これらの數多き可能性をひき出す力があるものでなければならぬ。我等を鞭撻して、常により高い階段を望ましめる力を持つてゐるものでなければならぬ。約言すれば、我等を叱り、我等を引上げ、我等を打碎き、我等を改造するに足るほど、複雑で偉大なものでなければならぬ。この意味に於て、我等に「無理」を強ひる力のないものは、我等の師と仰ぐに値せぬものである。

(三太郎日記)

西田幾多郎
石川縣の人、明治三
年生、哲學者、文學
博士、京都帝國大學
名譽教授。

一八 社會的意識と國家

西田幾多郎

我々は我々の子孫と共に、同一細胞の分裂に由りて生じた者である。生物は全種類を通じて、同一の生物と見ることができ。生物學者は、今日「生物は死せず。」といつて居る。意識生活に就いて見てもその通りである。人間が共同生活を營む處には、必ず各人の意識を統一する社會的意識といふものがある。言語・風俗・習慣・制度・法律・宗教・文學等は、すべてこの社會的意識の現象である。我々の個人的意識はこの中に發生し、この中に養成されたもので、この大いなる意識を構成する一細胞に過ぎない。知識も、道徳も、趣味も、すべて社會的意義をもつて居る。最も普遍的なるべき學問すらも、社會的因襲を脱し得ない。今日各國に學風といふものがあるのは、これが爲である。されば、所

謂個人の特性と、いふものも、この社會的意識といふ基礎の上に現れて來る多様な變化に過ぎない。いかに奇抜なる天才でも、この社會的意識の範圍を脱することはできぬ。反つてそれらの天才は、社會的意識の深大なる意義を發揮した人々である。眞に社會的意識と何等の關係なきものといへば、狂人の意識の如きものに過ぎぬ。

右の如き事實は誰も拒むことはできぬが、さてこの共同的意識といふものが、個人的意識と同一の意味に於て存存するとして、一の人格と見ることが出来るか否かについては種々の異論のあるところである。ヘフディングなどは、統一的意識の實在を否定し、森は木の集合で、これを分てば森といふものがない。社會も個人の集合で、個人の外に社會といふ獨立なる存在はない。」といつて居る。併し分析した上で統一が實在せぬから統

ヘフディング
丁抹の哲學者、コペ
ンハーゲン大學教授、
西曆一九三三年歿、年八
十八。

統一的自己

一がないとはいはれぬ。個人の意識でも、これを分析すれば別に統一的自己といふものは見出されないが、併し統一の上の一の特色があつて、種々の現象は、この統一に由つて成立するものと看做されねばならぬから、一の生きた實在と看做するのである。社會的意識も、同一の理由に由つて一つの生きた實在と見ることができる。社會的意識にも個人的意識と同じ様に、中心もあり、連絡もあり、立派に一の體系がある。唯個人的意識には肉體といふ一の基礎があつて、これが社會的意識と異なる點であるが、腦といふものも決して單純な物體ではなく、細胞の集合であるから、社會が個人といふ細胞に由つて成つて居るのと違ふ所はない。

かく社會的意識といふものがあつて、我々の個人的意識はその一部であるから、我々の要求の大部分はすべて社會的である。

他愛的要素

若し我々の慾望の中から、その他愛的要素を去つたならば、殆ど何物も残らない位である。我々の生命慾も、主なる原因は他愛にあるを以て見ても明らかである。我々は自己の満足よりも、反つて自己の愛する者、又は自己の屬する社會の満足に由つて満足されるのである。元來我々の自己の中心は、個體の中に限られたものではない。母の自己は子の中にあり、忠臣の自己は君主の中にある。自分の人格が偉大となるに従つて、自己の要求はいよゝゝ社會的となつてくるのである。

今少しく社會的意識の階級に就いて述べて見よう。抑、我々の社會的意識には種々の階級がある。その中最少であつて直接なものは家族である。家族とは我々の人格が社會に發展する最初の階級といはねばならぬ。男女相合して一家族を成すのは、單に子孫を遺すといふよりも、一層深遠なる精神的目的を

典型

もつて居るのである。人類といふ典型より見たならば、個人的男女は完全なる人ではない。男女を合したものが完全なる一人である。男子の性格が人類の完全なる典型でないやうに、女子の性格もまた完全なる典型ではない。男女の兩性が相補うてこそ完全なる人格の發展が見られるのである。

併し我々の社會的意識の發達は、家族といふやうな小團體の中にのみ限られるものではない。我々の精神的並びに物質的生活は、總べてそれらの社會的團結に於て發達する事が出来るのである。家族に次いで、我々の意識活動の全體を統一して一人格の發現とも看做さるべきものは國家である。國家の目的に就いては種々の説がある。或人は、國家の本體を主權の威力に置き、その目的は單に、外は敵を防ぎ、内は國民相互の間の生命財産を保護するにあると考へて居る。又或人は、國家の本體

を個人の上に置き、その目的は單に個人の人格發展の調和にあると考へて居る。併し國家の眞正なる目的は、第一の論者のいふやうな、物質的で又消極的なものではなく、又第二の論者のいふやうに、個人の人格が國家の基礎でもない。我々の個人は反つて一社會の細胞として發達して來たものである。國家の本體は、我々の精神の根柢であり、共同的意識の發現である。我々は國家に於て、人格の大いなる發展を遂げることが出来るのである。國家は統一した一の人格であつて、國家の制度法律は我々の共同意識の意志の發現である。我々が國家の爲に盡くすのは、偉大なる人格の發展完成の爲である。又國家が人を罰するのは復讐の爲でもなく、社會安寧の爲でもない。その人格に犯すべからざる威嚴がある爲である。

今日の處では、國家は統一した共同的意識の最も偉大なる發

ポロ
基督教の使徒、偏狭なるユダヤ的基督教を世界的基督教に高む、ポロ神學の樹立者（紀元前一六七）

ストア學派
西曆前四世紀末希臘の哲學者ゼノンの創めたもの、希臘・羅馬に於て隆盛をきむ、倫理宗教を中心とし、義務至上の嚴肅主義、博愛的世界主義をその特色とする。

現であるが、我々の人格的發現は此處にとゞまることは出來ない。尙一層大いなるものを要求する。それは即ち人類を打つて一團とした人類的社會の團結である。かくの如き理想はすでにポロの基督教に於て、又ストア學派に於て現はされて居るのである。只この理想は容易に實現されるものではない。今日はなほ武裝的平和の時代である。

遠き歴史の初から人類發達の迹をたどつて見ると、國家といふものは人類最終の目的ではない。抑、人類の發展には一貫の意味目的があつて、國家はその一部の使命を充たすために興亡盛衰するものであるらしい。しかし眞正の世界主義といつても、各國家が無くなるといふ意味ではない。各國家が益、強固となつて各自の特徴を發揮し、以て世界の歴史に貢獻する意味である。

（善の研究）

田中寛一
岡山縣の人、明治十三年生、文學博士、心理學者、東京文理科大學教授。

一九 日本民族の大使命

田中 寛一

日本民族の前途は洋々として希望に満ちてゐる。併しこれは可能性である。この可能性を實現するには、民族の各員の思慮と努力とを必要とする。徒に日本民族の優越性を自負したり、外國人の言動を模倣したりしてゐては實現は出來ない。日本民族の大使命を自覺し、その目標に向つて精進することによつてのみ達し得られる。

フイエは歐洲各民族について考察した後、その結論として、未來はアングロサクソンのものでもなく、獨逸人のものでもなく、希臘人のものでもなく、將又ラテン人のものでもない。最も聰明で勤勉で、且最も道德的なものの掌中に歸すべきである。」といつてゐる。日本民族の將來を思ふものは、須らくこの言を服

磨すべきである。

余は嘗て民族の將來に對する心理的條件を述べて、歡樂を追求し、贅澤に耽ることが、直接には民族を懦弱ならしめ、不道德に導き、物質尊重主義に傾かしめ、間接には人口減少を招來することを力説した。これは現代の歐米諸國における一つの通弊であるが、我が國にもその潮流は刻々に押寄せて來てゐる。「武士は食はねど高楊枝」の代りに、「金錢は品性なり」といふ考を持つものが我が國にも多くなりつゝあるのである。

文明の進歩は諸民族間の交通を頻繁にし、個々人相接する機會を多くするのみならず、印刷物等による思想の傳播を容易ならしめる。その結果、各民族とも新しい習慣、新しい思想、新しい信仰、新しい文藝に接觸する機會が多くなり、在來の道德思想が

權威を失ひ、人々の行動がまち／＼になり勝である。これは現代の諸民族が經驗してゐる所で、各國の指導者が、その頭を悩しつゝある問題である。思想の混亂不統一も或場合には進歩の階梯となることがあるけれども、それが極端に走つて一民族の傳統を破壊し去るときには、その民族は自滅する。吾等はこの點に於て深く注意しなければならぬ。即ち傳統的な中心思想中心感情は決して見失つてはならない。外來の思想や感情といふものは、たゞ傳統的なものに磨きをかけ、それを精練する材料としてのみ用ふべきである。そこで、外來思想に對する態度について一言しようと思ふ。

由來、人には古いものを棄てて新しいものに就かうとする心の一面がある。その好奇心を満足せしめつゝ文化の發達に貢獻する意味で、新しい思想の研究をするのは、強ち悪いことでは

ない。たゞし思想でも何でも新しいが故によいといふわけではない。これに反して歴史は尊い。蓋し歴史はその民族に適する思想の發現の跡である。同様に風俗習慣・道德・宗教等も亦その民族に適するもののみが成立したのである。この明らか
な事實を無視して、徒に新を追うて外國の眞似をするのは決して賢い仕方ではない。嘗て澤庵亡國論を唱へた人がある。然るに最近の研究によれば、澤庵にはヴィターミンBを多く含んでゐるので、榮養の上に大切なものだといふことである。西洋崇拜者の議論にはこの類のものが多し。注意すべきことである。たゞ我々の反省しなければならぬことは、風俗や習慣などの中には、その起る時には相當な理由があつても、時代を経過するに従つてその理由はとうの昔に消滅して、形ばかりが存続してゐることがあるといふ事實である。その様な場合には適當

な形に之を改良する必要がある。併し、些細な習慣でも、それを變改する時には、その結果として如何なる影響があるかを先づ考へなければならぬ。況や民族の中心思想に影響を及ぼす如き思想の研究者は極めて慎重な態度を執らなければならぬ。日本民族の唯一の誇とする忠君愛國の精神、建國の最初から一貫してゐるこの思想は、その根ざす所が極めて深い、従つて少數の者の變態思想によつて動搖を來すことはないとは信ずるけれども、世には附和雷同するものも少くないから、爲政者と教育家とは大いに注意しなければならぬ。従來日本人が徒に外國人の行動を模倣して得々としてゐた事は、苦々しいことであるが、それには大いに理由がある。その原因を探して見ると二つある。その一つは西洋諸國との交通を開いた當時からの情勢であり、他の一つは日本の文化に對す

る研究の不足である。

西洋文明の特徴は主として自然科学の研究とその應用にある。これらは、眼の前に容易に示されるものである爲に、彼と此との差のあることが解り易い。しかもこれは從來日本に最も缺けた點であつた。西洋文明に始めて接觸した吾等の先輩が、日本の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのは無理のないことである。その後、自然科学の研究は、その進歩に於て殆ど底止する所がなく、一步否數十歩も後れてゐた日本人は、唯單に彼等のやつたあとに追從して行くだけであつた。これが西洋崇拜の主なる原因である。崇拜の結果は一も二もなく總て彼等の行動はよいものと考へ、それを模倣すること一日後れば、一日時勢に後れる様に思つて、茲に模倣の競争といふ珍現象を惹き起したのである。誰も彼も一種の暗示にかゝつて、自己

を反省することをしなかつたのである。

右の様な情勢であつたから、その自然の結果として、日本文化に特有なものがあつかをさへ考へるものが少かつた。従つて日本文化の精髓の如何なるものであるかについては、多くの人々はまだ之を知らない。それは、一つは、自然科学の研究を模倣することに較べると著しく困難だからでもあるが、一つは、一部の人々を除いては、これを探究しようとする心さへも起さなかつたからでもある。而してその結果として、傳統的の中心思想をさへ失はうとしたのである。

併し、今や西洋文明の正體も略明らかなになり、心ある人々は内に自ら省みて、日本民族特有の文化について之を明らかにしようとするに至つた。今後は一方、西洋文化を研究しつゝ、しかもそれに囚はれず、他方、日本固有の文化について今一層深く研究

して、その美點と缺點とを明らかにし、東西兩文明の融合に向つて大いに努力しなければならぬ。日本民族の大使命を果さうとするには、それだけの努力を惜しむべきではない。

余は西洋文明を自然科学的文明或は物質的文明といったが、併し、それは一般的の言ひあらはし方である。彼にあつても我の大きいに學ばなければならぬ多くの精神的訓練がある。殊に日常生活に於ける對人的道德或は公衆道德に於て、我々の師とすべきものが少くない。

對人的道德の中で、信用を重んずること、時間を守ること、汽車電車等に於ける作法等に於て、日本は遺憾ながら英國人などに劣つてゐるとおもはれる。併し、是は日本人が先天的に不正直であり、他人の迷惑を考へない民族である爲ではない。不正直なことについていへば、英國人でも今日の様に世界に闊歩する

前には随分不正直な者が多かつた。度量衡でも正しいものがなく、パンの目方を増す爲に鐵の屑を入れて焼いたこともあつた。しかのみならず、外國貿易の發達につれて、成金者流は單に利益を得ることをこれ力め、我が國の商業界よりも一層徳義を重んじなかつたといふことである。然るに、正直は最良の政策である、商賣をするには信用第一、正直第一でなければならぬことに氣がついて來て、漸次今日の様に信用を重んずる風をなしたもので、決して最初から信用第一を標語とする國ではなかつたのである。我が國でも外國貿易についての經驗がまだ少いため、時に見本の品よりも悪いものを輸出する様があるが、今や漸次眼覺めて來てゐるから、遠からず信用第一の國になるであらうと考へる。

時間を守らないことについても次第に改善されてゐるが、ま

だ十分でない。これも社會生活に慣れない結果である。今後の經驗によつて、結局は時間を嚴守することが自他の利益であることを會得する様になるであらう。併し、これも自然の發達に任せないで、その改善を促進する様に心掛けなければならぬ。電車汽車等に於ける作法に於ても、まだそれらに對する訓練を受けることの日が浅いために、他人の迷惑を顧みない態度が多いのであつて、日本人が先天的に不作法なのではない。又處構はず、痰唾を吐くことも不作法の一つである。これは肺結核の慘害を味はつてゐる日本民族にとつては、不作法といふことの外に、公衆衛生といふ見地から特に注意を促す必要がある。要するに、日本人の公衆道徳上の缺陷は、廣い範圍の社會生活に慣れないことから來るものが多いが、その理由でこれを恕する譯には行かない。最高文明の建設者としては、此等の點に於

ても亦優れてゐなければならぬ。

今一つ必要なことは、科學の研究とその應用とである。日本には外國にない様な尊い精神文化があるけれども、それだけでは優越民族にはなれない。その上に更に科學的知識を利用して、生活の改善と能率の増進とを企てなければならぬ。殊に我が國の如く天産物に於て餘り恵まれてゐない國では、生産の人的要素たる科學的知識の應用を一層努めなければならぬ。

將來の大文明を荷なふ爲には、日本民族の努力すべき尙多くの事項があるであらうが、要は現實に即しつゝ、高遠の理想を追求するにある。余は上述の事柄を總括し、更にそれに關聯した數語を加へてお互の誠としたいと思ふ。

長を採り短を補へ。これは日本民族の傳統的精神である。

この精神を實現するには、西洋文明について學ぶと共に日本固有の文明を一層深く究めて、そのよい點と悪い點とを明らかにしなければならぬ。

我等の力と使命とを自覺せよ。而して貧しいことを悲しむことなく、つとめて歡樂から遠ざかれ。「自己を愛するものは亡びる。」といふ訓言に聽け。

子孫の爲に自己を苦しめよ。一人よりも二人、二人よりも三人、四人、五人と、より多くの子寶をもて。然らば、その中から偉材の輩出する蓋然率が増すであらう。偉材こそは民族の寶である。平時にも、戦時にも、最も必要なは多數の偉材である。

精神と共に身體を鍛へよ。心身の健全は日々の能率を増す資本であり、文化向上の源泉である。

志を固く持て。忠孝一致、忠君愛國は古來一貫した日本民族

の中心思想であり、大和魂である。我が日本民族にとつて、これに優る思想はない。

教育の振興と産業の發達とは國防の確立と共に民族發展の基礎である。各自その適する所について、各、その素質を發揮し、以て最高文明の生産といふ日本民族の大使命を完成せよ。

四海同胞主義は人類究極の理想である。我等は日本民族の精神文化の宣揚によつて、世界人類を導いて協調の道程に上らしめなければならぬ。けれども正義は常に之を擁護する覺悟を必要とする。正義の戦に對する準備なき民族、即ち現實を忘れた民族は、結局高遠の理想に達し得ない。

現實に即しつゝ、しかも高遠の理想に向つて精進せよ。これ日本民族の大使命を果す唯一の條件である。

(日本民族の將來)

附 録

上古・中古文學

編

者

上古とは太古から奈良朝の末期までを含む。この時代は文化なほ未だ一般に徹底せず、外邦文化は移入せられたとはいへ、國民思想の根柢に深く影響を及ぼしたとも考へられない。固有の國民精神が最も眞率に文學の上に反映してゐたと見てよい時代である。この時代は、文學史上大體天武・持統・文武三帝の飛鳥朝を境界として、前後二期に分つことが出来よう。

「太初に道あり、道は神と偕にあり、道は神なり。」と、ヘブライの聖徒はいつたが、我等の祖先の間にも、またかうした思想はあつた。「神代よりいひつてけらく、そらみつ倭の國は皇神のいつく

しき國、言靈のさきはふ國。」と、萬葉人の歌つてゐるのは、やがてそれである。要するに、言靈とは上代人が言語にあると信じた神祕性に外ならぬ。彼等は既に言靈を信じた。故にわれに敵對する仇人の上に災禍あれと願ふ時にも、また自他の上に吉祥を請來しようと思ふ時にも、彼等はこれに縋つてその目的を達し得ると信じた。「のろひまたいのり」といふ語に共通する「のり」といふ語の意義に想到する時、そこに言靈の發動を見ることが出来ると。

祝詞(のりと)こそは、この言靈の信仰が、祭祀と結びついて發達した文學である。即ちそれは國家的祭祀にあつて救命を奉じて神祇に奏し、若しくは神前に集つてゐる羣臣・神職等に讀み聞かせる祭神の詞で、その淵源は、祭祀の起源と共に、遠く有史以前に溯るべきものと考へられる。現存の祝詞は後世の筆録に

かゝるが故に、それは必ずしも原形のまゝだとは考へられないけれども、その性質上大體に於て古體を存してゐると信じてよからうし、ほゞ大寶令の前後には、今日のやうな祝詞は出來てゐただらうと古人も考へてゐる。

神人交渉の文學である祝詞と並んで、古代人の間にはまた人交渉の文學も生まれたことは自然の數である。それは即ち歌である。

歌は本邦文學史上最も重要な地位を占め、過去の殆どすべての文學は、これと何等かの點に於て相交渉せぬものはないといつていい。傳説によれば伊邪那岐伊邪那美の二神が天の御柱を繞つて唱和し給うたのが、その濫觴だといふが、その當否はともかくも、かうした感情の高まりに於て自然に發せられた嘆聲が、自ら一種韻律的のひびきをなすところに、歌の萌芽はあつた

ものではないだらうか。そして年月と共に漸次彫琢と鍊磨とが加へられるに及んで、歌の形式が整正せられ、内容もますます藝術的に發展していつたものであらう。

古代人の心境は單純であるが故に、歌に於けるその感情の表現もまた幼稚であることを免れない。それと共に、また露骨であり、直截である。故に藝術としては完成の域を去ること遠きは已むを得ないところではあるけれども、それらはえもいはぬ迫力の伴うてゐること、また争ふべからざる事實である。彼等の生活の中心は鬪争と愛憐とであつた。しかもその歌ふところは勝利と陶醉とであつて、敗北と悲哀とはその内容でなかつたことも注意せらるべきである。

抑、本邦の古代には文字はなかつた。神代文字といふものも存在を高唱する學者もあつたが、その論據は漠として捉へどこ

ろのないものであつた。文字は多く三韓を通じて入つて來た支那文化の齎した賜物である。その傳來が果して何れの年であつたかは知り難いけれども、史上に明徴のあるのは、應神仁徳の朝以後である。しかし履中天皇の御宇に諸國に國史を置き給うた際にも、それに任ぜられた者は歸化人であつたことに見ても、文字が邦人のものとなるまでには、かなりの歳月を要したことは知られる。欽明天皇の朝に佛教が將來せられ、後になつて、文字は一般に親しまれるやうになつて來た。

支那及び印度の文化が傳來して歳月を経るにつれ、本邦の文化もまた異常の發展を見、諸般の制度・文物その面目を一新したかの觀があり、殊に美術・工藝の發達は驚異に値すべきものがある。しかもその文化の恩澤に浴する者も極めて狭い範圍に限られ、且外邦思想の影響も、多くは表面的にとゞまつて、内面的に

深刻には及び得なかつたことは注意すべきである。

飛鳥朝から奈良朝に互る約百年間に、本邦文學史は第一次の黄金時代を迎へたと見てよい。前期以來發達の道程を辿つてゐた漢字の使用法は、本期に入つて益、自由を極め、驚くべき巧妙の域に達した。かくて、それを驅使して前期の末頃から本期にかけて、幾多の述作がなされた事は想像するに難くない。その今日に残されたもの丈でも、史籍地誌詩集歌集等數十卷に及んでゐる。盛んなりと謂つてよい。今、その代表的の二者を語らう。その第一は、古事記である。天武天皇は諸家齎すところの帝紀及び本辭の多く虚偽を加へてゐることをなげかせられて、修史の事を起し給うたが、天皇の崩御と共に、御雄志も中道にして頓挫したのを、元明天皇がその御志を紹いで太安麿をして撰録せしめ給うたのが、本書である。かくてその中核をなす主題は、

皇室を中心として國家組織を闡明しようとする點にある。大和民族の發生から、民族鬭争へ、そしてやがて國家の統一へ、かくて、我が大和朝廷の稜威の四海に光被するに至つた徑路を明らかにせんが爲に、神話傳説を經とし、史實を緯とし、遊離説話を以てその間を點綴して、一大敘事詩が展開して行くところに、神也として以外に、古事記の文學的價値が存するのである。

その第二は、萬葉集の結集である。萬葉集二十卷四千五百首の長短歌こそは、この期に發達した歌の總集である。誰がいつの世にこれを集めたかは、なほ定説がない。今、本集の歌を見るに、前代の歌は殆どすべて作家の生活に即した主觀詩であつたが、當代の作家は、その眞率な情感を歌ふと共に、自然を靜觀する餘裕をも生じ、また極めて少數ながら深く人生を省察する者さへも出るに至つた。これ明らかに漢詩文や佛教思想に影響せ

られたところであつた。なほ長歌に伴ふ反歌、さては應詔題詠等の作の盛んに行はれたことなども、大陸の文學から被つた影響であつた。

この時代の歌は、ほゞ天平時代を境として、前後二期に分けることが出来る。前期に於ては、まづ持續文武の朝に出た柿本人麿が偉大な作家として數へられる。彼に次いで天平の初年まで生存してゐた山邊赤人また彼と相如く聲價を得てゐる。しかもこの二家は全く作風を異にし、前者が抒情的作風を以て當代に獨歩してゐるに對して、後者は敘景的作品を以て優秀な地歩を占める。その他山上憶良、大伴旅人等またこの二者に多く譲らぬ特色ある作品を後代に遺してゐる。如上の作家羣の世を去つた後に來るのが後期で、その中心作家は大伴家持であつたが、要するに前期に於てほゞ完成の域に達した作風を、後期の

作家達はたゞ述づけてのみ行くかの觀がある。併しこの時代の歌が今日に遺されたのは、彼等の努力に俟つものが多かつたといつてよい。

桓武天皇の平安奠都から源頼朝の鎌倉幕府開設に至る約四百年を、こゝに中古と名づける。平城京から平安京へ都が遷つて、前代の權門は多く失脚し、獨り榮えたのは北家藤原氏である。この時代の文學は藤原氏と共に終始してゐる。即ち藤原氏の基礎が確立した清和天皇の朝に復興の曙光を見、その威勢漸く加はり、次いでその最高潮に達した醍醐天皇から後一條天皇の御宇にかけて、文學またその妍を競ひ、爾後衰頽の運を辿りつゝ、院政時代に入つては、殆ど強弩の末勢の悲哀を見せて、次代へと推移してゆくのである。

前後四百年、その間武を邊境に用ひたことも一再ではなかつ

たが、都人士はひたぶるの太平を樂しんだ。上代樸野の風は銷磨せられて、文雅の風は滿朝に及んだ。しかも庶民に至つては文化の餘澤にすら霑ふことが出來ず、永へに社會の下層に沈淪して、貴族の頤使に甘んじてゐなければならなかつた。かくて當代の文學は徹頭徹尾貴族の文學であつた。

政權を私した彼等には、家門の繁榮のためには、何物をも犠牲に供して顧みない。阿附迎合黨同伐異は彼等を繞る殆どすべてである。そしてその日常は煩瑣な儀禮と、それに附隨して管絃の演奏と詩歌の贈答とばかりであり、その多くは徹底した眞劍味を缺いた遊戯的なものであつた。

當代の人士はまた佛教にも多大な關心を有つてゐた。南都の佛教は衰へて、それに代つたものは最澄、空海によつて將來せられた顯密二教であつたが、その事とするところは國利民福の

大から治病安産の小に至るまで、多く現世の利益に係つてゐたが故に、事相の隆昌はあれど、教相の研究は寧ろ忽諸に附せられたるかゝの觀があり、僧侶等また權門に阿附して、その庇護の下に世間的榮華を貪る者多く、人心の祕奥に深き影を投ずることはまだ認め難かつた。

既に述べたやうに、當代の初頭文壇に勢を張つてゐたものは漢詩文であつた。漢詩文は、近江朝頃から漸く盛大となる機運に向ひ、奈良朝時代に於て、かなり廣く行はれたが、その甚しく隆盛を極めたのは嵯峨淳和兩帝の御宇であらう。上に英邁嵯峨天皇おはしまし、下に英才空海篁等出でて、新京の文運は實に惠まれたものがあつたと稱してよい。詩集、また前代に出た懷風藻に次いで、弘仁天長の御代に凌雲文華秀麗經國の三集の敕撰をさへ見た。

しかし、漢詩文は到底外邦の詩である。衷心の感懷は、これを盛るに外國の言語、外國の詩形を以てすることの不自然であることは言を俟たない。かゝる情勢の中に、多年漢詩文に抑壓せられて來た和歌の再び擡頭すべき機運が醸成せられつゝ、あつたのである。かくて遂に六歌仙の時代が歌の歴史の上に来たのである。六歌仙の時代とは、清和天皇から宇多天皇に至る時代を包含すると見てよい。奈良朝の末期から雌伏してゐたといへ、一步步々々力強き歩みをつゞけて來た歌が、再び表面に現はれた時には、萬葉集の歌に比べて甚しく纖細にして優麗な趣致を帯びてゐたことを感じる。在原業平・僧正遍昭・小野小町などは文學史に特殊の光彩を放つ作者である。

なほ國文學の振興に與つて力あるものは假名文字の發達である。漢字を假りて國音を寫さうとしたのが假名の起源で、そ

の源流は、現存の資料を以てしても、なほ且遠く推古天皇の御宇に溯ることが出来る。しかし全く漢字の原形から離れて國字の體をなしたのは、ほゞ當代の初期であつたと考へられる。殊に草假名に見られる流麗さこそは、恐らく中古の國文學を通じて流れる氣分を最もよく象徴するものであらう。

假名文字の制作と共に發達したものは、散文の文學である。古事記は敍事詩の上乗なものではあるが、今日ではその全部を正確に當時の言語もて讀むことは恐らくは不可能のことであらう。眞にその時代の國語もて書かれた散文の文學は、中古期に入つて始めて出たといふも、必ずしも誣言ではない。現存の竹取物語は、その意味で本邦最古の散文の文學と稱してよい。竹取物語は多分に童話味を帯びた興味ある物語で、佛典や神仙談などに影響せられたこと多大である。これと竝んで當代の

ものと考へられる作に伊勢物語がある。彼が一貫せる構想の上に立つ傳奇であるに對して、これは個々の歌に關聯せる小話を集めて、その大部分が同一の主人公を共有してゐるといふこととまゝ、所謂歌物語である。そしてこの二種の物語は、後に續出する物語への歸趨を暗示してゐる點に於て特に價值多いものである。

平安朝の初期から宇多天皇の御宇までは、要するに次いで來るべき黄金時代に對する準備時代であつた。寛平六年菅原道眞の奏請によつて、遣唐使が廢止せられた事は、邦人が漸く大陸文化から離れて、獨自の道に進むよき機會を與へたと考へられる。その前後から從來鵜呑みにして來た大陸文化は咀嚼せられ、消化せられて日本化せられた事は、生活様式の上に、美術工藝の上に、明らかに看取する事が出来るが、文學の上にも、また同様

の情勢が見られる。醍醐天皇の御代から後三條天皇の御代頃まで、約二百年を平安朝文學の最盛期とする。この二百年を前後二期に分けて考へると、延喜天曆を中心とする約百年は歌の時代であり、道長時代を中心とする約百年は物語の時代である。歌の時代はまづ古今和歌集の撰進に始る。撰者の一人なる紀貫之が書いたといはれる序文は、實に彼の抱負を窺ふべき大文字である。劈頭まづ「やまとうたは人のこゝろをたねとして、よろづのことはとぞなれりける。」といつた「やまとうた」といつたところに、明らかに漢詩に對抗して歌の地位を確保しようとした意氣が燃えてゐるやうに思ふ。從來漢詩に對して甚しき卑下を感じてゐたであらう歌の地位は、こゝに彼と少くとも對等のものとなつた。詩の六義を歌に固有のものであるかについて、「からのうたにもかくぞあるべき」といつたのは稚氣滿々

たる表現ではあるが、これまた已むに已まれぬ作者胸奥の不平の迸りと見れば、深く咎めるには及ばないであらう。とにかく、本集敕撰の事によつて、歌は從來の漢詩の地位にとつて代ることとなり、爾後數百年に互る歌集敕撰の基をなしたのである。たゞその歌は上代に見るやうな眞率さは失せて、著しく思惟的・理智的な傾向が現れて來たけれども、大體に於て典雅純正な抒情詩が完成せられて、後代の歌人の進み行くべき道が擧示せられたのであつた。

御堂殿の代を中心とする物語の時代も、一朝にして成つたものではなかつた。竹取物語の後、物語の製作が相次いだことは、諸書に散見する書名を見て知ることが出来るが、現存の宇津保・落窪等の物語に見て、そこに著しく寫實味の加はつて來たことが注意せられよう。また日記と名づけて、我が過ぎ來し方の追

憶をものすることも行はれたが、これらは日記とはいへ、甚だ物語風な、所謂私小説に類する作品である。これらいろいろの作品の後をうけ、それらの要素が合して一になつたところに、源氏物語が生まれ出るのである。

源氏物語が紫式部の作であることは定説である。恐らくあの大作が、一時に出来たとは信じられないが、一條天皇の寛弘年間には、少くともその一部分は、宮廷の間に行はれてゐたことは確である。この物語は大體二部に分つことが出来る。即ちその第一部は前四十一帖で、光源氏君を主人公とし、第二部は後十三帖で、光君の子薫大將を主人公としてゐる。さて、この作者の意圖がいづれにあつたかは、古來學者の論議の種となつてゐるところではあるが、讀者をして、あるがまゝの平安朝貴族の生活はかくもあつたらうと首肯せしめるところ、作者の寫實的筆致

は驚くべきものがある。その描寫は微に入り細を極めて、情景二つながら生動し、人物の性格もほゞ書き別けられ、事件の推移も極めて、自然である。約千年の昔に一巾幘の手に、かくの如き大作が成されたことは、實に世界文學史上の一大驚異である。

源氏物語と並んで平安朝文學の一傑作は枕草子である。清少納言のものした隨筆であるが、その犀利な觀察と冷徹な批判とを、作者独自の文章をもて行つたところ、何人もたやすく企及し得ない才筆で、永く國文學史上の珠玉として光彩を放つべき作品である。

源氏物語以後、小説の書かれたものは數多かつたけれども、その多くは源氏の糟粕を嘗めるもののみで、見るに足るべきものは少い。彼等の中には徒に筋の運びに怪奇を求めてやまず、遂には甚しき不自然をも顧みないものさへ出るに至つた。

さしものに榮華を極めた藤原氏も、御堂殿の世を限りとして、一路凋落の道を辿つて行つたが、白河院が院中に政を聽き給ふに及んで、ますますその勢を弱め、名は昔ながらに攝關といひ、大臣といふと雖も、たゞ虚器を擁するに止まつてゐた。しかも藤原氏に代るべき新勢力はまだ現はれない。過去の盛時をなつかしむ情は、大鏡、榮華物語等歴史物語を生じ、また次の時代に興るべき説話文學の先蹤として、今昔物語集が集められた。しかし、これらのものより文壇的に注目すべきことは、歌がやゝ活氣を帯びたことと、歌論が勃興したこととである。

歌は古今集を宗として、その歌風を踏襲するばかりで、單調な生活から詠み出される作は、殆ど變化なく、萎靡沈衰の狀にあり、圓融天皇の御代に、曾根好忠がその語彙の上に一道の清新味を加へようとしたので、時流からは狂を以て目せられた。一

條天皇の御宇は、文學的に恵まれた時代であり、歌に於ても幾多の優れた作家が輩出したが、和泉式部等少數者を除いては特記すべきものがない。かく行き詰まつた歌壇は、いつかは轉回せざるを得ない。その轉回の傾向を窺ふべきものは金葉集である。しかも歌壇の本流は、なほ依然として舊に由つてゐるので、外觀こそ頗る盛大には見えるけれども、實質的には頗る索漠たるものがあつた。

製作のあるところに評論の伴ふのは必然の數である。本邦の評論史は、その當初に於ては歌論史であつた。歌が特にその對象となつたのは、歌が最も尊重せられてゐたからである。所謂四家式がどの程度まで信ずべきかは措いて問はぬ、たゞ歌論の濫觴を奈良朝まで溯り、こゝにも亦支那文學の影響の否めな

いのは事實である。かくて古今集序以後、歌合の盛行につれて

歌論はます／＼行はれ、その結果は歌壇にも黨同伐異の傾向が現はれ、源俊賴と藤原基俊とは、新舊二派を代表してゐたかに見える。またこの二派の間に介在して、藤原清輔も亦父祖三代の家學を繼承して、後に歌道に門閥を生じる基をなした。かく諸家の風混沌として、歌壇はその適歸するところに迷うてゐた時に、出たのが藤原俊成であつた。彼は新舊兩派の門を敲き、諸流の風を涉獵し、これを折衷して、こゝに中正にして、優雅な歌風を興した。その成果はこれを後白河法皇の院宣によつて、彼が撰進した千載和歌集に窺ふことが出来る。この集は中古時代の掉尾を飾る寶玉であると共に、やがて來るべき歌壇に對する示唆である點に於て、特に重要視せらるべきである。

訂五新日本讀本卷十 (終)

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正) (千八百五十八字)

【一】一丁七丈三上下不
世丙並【丁】中【、】丸主
【了】之久乏乘【乙】乙九
乞也乳亂【了】了事【二】
二五五井【二】亡交京亭
亦【人】人仁仇今介仕他
付代令以仰仲伴任伊伏
伐休伯伴伺似位低佳佐
何余佛作伸使來佳例侍
供依侮侯侵便係促俱俊
俗保俠信修俳俵倅併倉
個倍倒候借倫假偉偏停
健側偶傍傑備催働傳債
傷傾僅像僚偽僧價儀億

儉價優【元】元兄充兆兎
先光克兌免兒【入】入内
全兩【八】八公六共兵具
共典兼【冊】冊再【元】元
【シ】冬冷涼准凌凍【凡】凡
凡【口】凶出【刀】刀刃分
切刊刑列初判別利到制
刷券刺刻則削前剛副剩
割劊劊劊劊【力】力功加
劣助努効勅勇勉勸勸務
勝勞募勢勤勸勸勸【力】力
包【匕】化北【區】區【十】十
十千升午半卑卒卓協南
博【卜】占【印】印危却卵

卷卽【厄】厄厘厚原厥
【去】去參【友】友反叔
取受【口】口古句叫召可
史右司各合吉同名后吏
吐向君吟否含呈吸吹告
咸周味呼命和咽哀品員
哲唐唯唱商問啓善喉喜
喪喫單嗣嘉器噴嚴囁
【四】四四回困困固國團
園圓圖團【土】土在地坂
均坊坑坪垂型埋域城執
培基堀堂堅堤堪報場塔
塗塵境墓塀增墨墮壁壇
壓壤【士】士壯壹壽【又】又

夏【夕】夕外多夜夢【大】大
大天太夫央失奇奉奏契
奔奢與奪獎奮【女】女奴
好如妃妊妥妙妨妹妻姉
始姑姓委姦姪姪姻姿威
娘娛娠媚婚婦婿媒嫁嫡
嫌孃【子】子字存孝季孤
孫學【宅】宅守安宏完宗
官定宜客宜室宮害宴家
容宿寄密富寒察寢寢寢寢
寫寬寶【寸】寸寺封射將
專尉尊尋對導【小】小少
尙【尤】就【尸】尺尼尾尿
局居屈屈屋展層履屬

【山】山岡岩岳岸峙峯島
峽崇崎嶇【川】州巡巢
【工】工左巧巨差【己】已
【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣【干】干
平年幸幹【幻】幼幾【床】
床序底店府度座庫庭庶
康廉廓廢廣廳【延】延廷
建廻【弄】弄弊【弋】式
【弓】弓弔引弟弱張強彈
【形】形彩彫影彰【役】役
彼往征待律後徐徑徒得
從御復徵微德徹【心】心
必忌忍志忘忙忠快念怒
思急急性怨怪怯恐恥恨
恩恭息悔悟悖患悲惟悼

情感惜惠惡情惱想愁愉
意愚愛感慈慈慕慘慢慎
慣慨慮慰慶慈憂憐憚憲
憶憾憤懇應懲懷懸戀
【戈】成我戒戰戲戴【戸】
戸戾房所扇【手】手才打
扱扶批承技抑投抗折抱
抵押披抽拂拍拒拓拔拘
拙招拜括拳拾持指振捕
捧描捨掃授掌排掛探探
控推揚接提換握揮搦揮
援損搖搜摘携摩撫擇擊
操擔據擬擴攝【支】支
【支】收改攻放政故敍教
敏救敗敢散敬敵敷數整
【文】文【斗】斗料斜【斤】

斤斤斬新斷斯【方】方施
旋族族旗【无】既【日】日
且旨早旬旭昇昌明易昔
星春昭昨是映時晚晝普
景晴晶智暇暖暗暑暮暴
曆疊曜【目】曲更書曹會
替最會【月】月有朋服朕
朔望朝期【木】木未末本
札朱机朽杉材村東柿杯
東松板枕林枚果枝枯架
柄某染柔查柅柱柳栗校
株根格栽桃案桐桑梅條
梨械棄棋棹棟森棺植楠
業極榮構概樂樓標樞模
樣樹橋機橫檄檢櫻欄權
【欠】次欲款欺歌歌歐歡

【止】止正此步武歲歷歸
【歹】死殊殉殖殘【爻】段
殺殿毀【母】母每毒【比】
比【毛】毛【氏】氏民【氣】
氣【水】水水永汙求汗汚
江池決汽沈沒沖沙汰河
沸油治沼沿況泉泊法波
泣泥注泰泳洋洗津洪活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑淚淡淨淫深混清淺
添減淵渡温測港渴湖湧
湯源滲溢溶溺滅滋滑滯
滴滿漁漂漆漏濱漕濃濕
漫漸潔潛湖澤激濁濃濕
濟濱瀧灣【火】火灰災炊
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熟熱燃燈燒營爆爐【爪】
爪爭爲爵【父】父【爻】兩
【片】片版牌【牙】牙【牛】
牛牧物牲特犧【犬】犬犯
狀狂狩狹猛猶獄獨獲
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉
王玩珍珠班現球理琴環
璽【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
如耆畝略番畫異雷當疊
【足】足疎疑【疒】疫痲疾
病症痘痛痢瘵癰【登】登
發【白】白百的皆皇【皮】
皮【皿】皿盆益盛盃盃盃盃
盃盃【目】目盲直相省眉

看眞眼眼着睡督【矢】矢
知短【石】石砂砲破研硬
硯碁碎碑確磁磨礎【示】
示社祈祕祖祝神票祭禁
禍福禦禮【禾】秀私秋科
秒租秩移稅程稚種稱稻
稿穀積穗穩【穴】穴究空
突窃窺窗窺【立】立章童
端鏡【竹】竹竿笑笛符第
筆等筋筒答策算管箱節
範築篤簡簿籍【米】米粉
粒粘粗粹精糖糞【糸】系
紀約紅紋納純紙級紛素
紡索紫累細紳紹紺綠組
結絕絡給統絲絹經綠維
綱網綴綻綿緊緒線絳絳

編綬緯練縛縣縫縮縱總
績繁織繕繪繭線繼續
【缶】缺【罽】罽置署罰罵
罷羅【羊】羊美羣義【羽】
羽翁翌習翼【老】老考者
【而】耐【耒】耒耕【耳】耳聖
聞聯聲職聽【聿】聿聿
【肉】肉肖肝股肥肩育肺
胃背胎胞胸能膂膂脊
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜
膝臄臄膺臄【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【目】與興舉舊【舌】舌舍
【舟】舞【舟】舟航般舵舶
船艦【良】良【色】色【艸】
芝花芽芳苑苗若苦英茂

茶草荒荷莊菊菌菓菜華
萬落葉苦葬蒙蒸著蔓池
藏藝藤藥【虎】虎虞處虛
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲
蠶蠶【血】血衆【行】行術
街衙衙衙【衣】衣表袈袈
袖被裁裂裏裕補裝裸製
復喪襲【西】西要覆【見】
見規視親覺覽觀【角】角
解觸【言】言訂計討訓託
記訟訪設許訴診詐詔評
詞詠試詩詰話詳誇誌認
誓誕誘語誠誤說課調談
請論論諸諾謀諷諂講謝
語謹謬證識譜警譯議護
譽讀變讓【谷】谷【豆】豆

豐【豕】豚象豕豫【貝】貝
貞負財貧貨販賈貯貳
貴買貸費賀賀賈賄賄賄
寶賜賞賢賣賤賦質賴購
贈贊【赤】赤【走】走赴起
超越趣【足】足距跡路踊
躍【身】身【車】車軌軍軒
軟軸較載輕輩輪輯輪輿
轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰
農【毛】込迎近返迫迭述
迷追退送逃逆透逐途通

速造連週進逸遂遇遊運
過道達達遙遞遠遣適遭
遲遲選選避避還邊遵【邑】
邦邪邸郊郎郡部郵都鄉
【酉】酌配酒酢酬酷酸醉
醜醫【采】釋【里】里重野
量【金】金釜針釣鈍鈴鉛
鉢銀鉢銅銘銳鋒鋼錯錄
錢鍋鎖鎖鏡鑄鐘鐵鑑鍍
【長】長【門】門閉閉閉閉
開開關【阜】防附降限陞

院陣除陪陳陰陵陶陷陸
陽隆隊階隔際際障隣隨
險隱【隹】隹雀雄雅集屨
唯雙雜離離【雨】雨雪雲
零雷電雷震霜霧露靈
【青】青靜【非】非【面】面
【革】革靴【音】音響【頁】
頂項順頤預頤頤頭頻題
額額顛顛類顛顛【風】風
【飛】飛翻【食】食飢飲飯
飾養餓餘餅館餐【首】首

【香】香【馬】馬馳駁駁駐
騎騰騷驅驗驚驛【骨】骨
髓髓【高】高【髟】髮【門】
闕【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮
鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
【廌】廌【鹿】鹿躍【麥】麥
【麻】麻【黃】黃【黑】黑獸
點黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】
齋【齒】齒齡【龍】龍【龜】
龜

注意

(一) 本表にない漢字は假名で書くこと (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、ただし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること (三) 代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞 および助詞はなるべく假名で書くこと (四) 外來語は假名で書くこと。

略字表

(臨時國語調査會發表)

左の字體を本位として用ひること。
(括弧内の小字は字典體)

勸(勸) 權(權) 灌(灌) 歡(歡) 觀(觀)
沢(澤) 扒(擇) 訳(譯) 馱(驛) 秋(釋)
変(變) 恋(戀) 蛮(蠻) 灣(灣)
莖(莖) 徑(徑) 經(經) 輕(輕)
併(併) 塀(塀) 瓶(瓶) 餅(餅) 研(研)
齊(齊) 齋(齋) 濟(濟) 劑(劑)
殘(殘) 淺(淺) 賤(賤) 錢(錢)
勞(勞) 營(營) 榮(榮) 學(學) 覺(覺)

举(舉) 譽(譽) 断(斷) 繼(繼)
齒(齒) 齡(齡) 湿(濕) 頭(顯)
窓(窗) 綫(總) 属(屬) 囑(囑)
為(爲) 偽(偽) 帶(帶) 滯(滯)
參(參) 慘(慘) 兩(兩) 滿(滿)
癸(發) 癆(癆) 胤(胤) 獵(獵)
乱(亂) 辭(辭) 潜(潛) 贊(贊)
走(走) 徒(徒) 位(從) 縱(縱)
惱(惱) 腦(腦) 処(處) 扱(據)
担(擔) 胆(膽) 耒(來) 麥(麥)
寿(壽) 鑄(鑄) 數(數) 樓(樓)

容内の特獨書本

- 一 大 意
- 二 文 段
- 三 語 句 釋
- 四 通 釋
- 五 頭 註
- 六 鑑 賞

七 研究問題

- イ 豫習方法について
- ロ 次の文を解釋せよ
- ハ 文法問題
- ニ 書取・練習文字
- ホ 各章につき感想を記せ

發行所 文教書院

發賣所

東京市神田區保町一丁目二五ノ一(振替東京二六四四番)
大阪市東區博労町五丁目五六番地(振替大阪四七一番)

修文館

澤義則氏 四六判表紙グラビア版美本
新日本讀本自習書 全拾冊

定價各金參拾八錢 送料各四錢

▼御註文は最寄の書店又は振替前金でお願いいたします

定	價
八	各金六拾錢
十	各金五拾五錢

吉澤義則

神保町一丁目二五ノ一

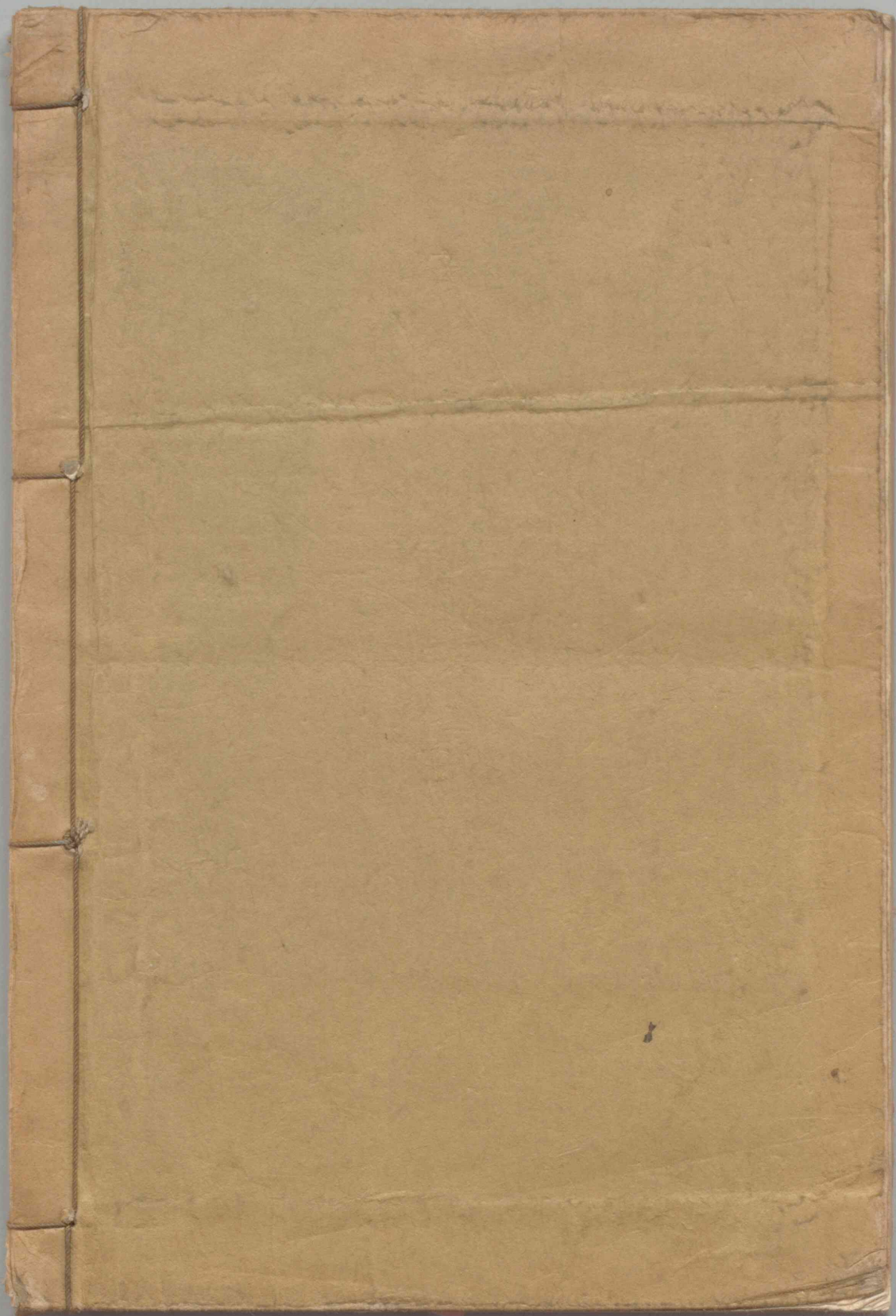
鈴木政雄

博労町五丁目五六番地

鈴木常松

振替口座東京二六四四番
文館

振替口座大阪四七一番



日本文學年表

(訂五) 新日本讀本附錄

文 學 種 類

世 近	古 近	古 中	古 上
(代時戶江)	(代時町室・倉鎌)	(代時朝安平)	(代時和大)
<p>假名草紙 太閤記 浮世草紙 日本永代藏 世間胸算用 武道傳來記 草雙紙 黃表紙 酒落本 讀月物語 雨月物語 椿説弓張月 里見八犬傳 合卷本 滑稽本 東海道中膝栗毛 浮世風呂</p>	<p>宇治拾遺物語 石清水物語 古今著聞集 十訓抄 水野拾遺鏡 吉野拾遺鏡 增野正統記 神皇正統記 保元平治物語 平家物語 平家盛衰記 源平盛衰記 太平記 義經記 曾我物語 小倉草紙</p>	<p>宣風日本書 古事記 祝詞 伊勢物語 津保物語 宇佐物語 落窪物語 源氏物語 狹衣物語 堤中納言物語 今昔物語 榮華物語 大鏡 今鏡</p>	<p>祝詞 古事記 日本書 宣風日本書 命記</p>
<p>嵯峨日記 花屋日記 七番日記 奥の細道 旅のなぐさ 菅笠日記</p>	<p>東關道紀行 十六夜日記</p>	<p>蜻蛉日記 紫式部日記 和泉式部日記</p>	<p>士佐日記</p>
<p>賀茂真淵集 桂園一枝 狂歌 古今夷曲集 萬歳狂歌集 良寛和尚歌集</p>	<p>御傘 (松永貞徳) 宗因千句 芭蕉七部集 蕪村七部集 一茶發句集</p>	<p>八新古今集 金槐和歌集 玉葉集 新葉集</p>	<p>萬葉集 (長歌) (短歌) 萬葉集</p>
<p>流歌行 長吟 歌津 常盤 清元 御詠歌 松の落葉</p>	<p>俳諧 菟玖波集 大菟玖波集 新菟玖波集</p>	<p>連歌 梁塵秘抄 新撰朗詠集 淡和朗詠集 催馬樂 神樂歌</p>	<p>民謡</p>
<p>淨瑠璃 國性爺合戰 曾我會稽山 (近松門左衛門) 菅原傳 手習鑑 假名本 忠臣藏 (竹田出雲) 本朝二十四孝 (近松半二) 脚</p>	<p>狂言 狂言曲</p>	<p>舞曲 小歌</p>	<p>神樂歌</p>
<p>幻庵選記 風俗文 鶉衣 折焚く柴の記 駿臺雜話 雲萍雜志 閑田耕筆 玉勝間 花月草紙 泊酒筆話 梧窓漫筆 松廼舍落葉 年々隨筆 藤篋冊子 琴後集 うけらが花</p>	<p>徒然草</p>	<p>枕草紙 袋草紙 文鏡秘府論</p>	<p>懷風藻</p>
<p>羅山文集 藤樹先生文集 白石詩草 鳩巢文集 栗山文集 山陽詩集 山陽文集 言志四錄 正氣歌常陸帶 新氣歌常陸帶 星巖 拙堂文集</p>	<p>五山文學</p>	<p>凌雲集 文華麗集 經國文粹 木朝文粹</p>	<p>懷風藻</p>

自二六三
至二五二
二二七

曾我物語
お伽草紙

嵯峨日記
花屋日記
七番日記

假名草紙
浮世草紙
日本永代藏

御傘
宗因千句
芭蕉七部集

流歌
長吟
歌行

浄瑠璃
國性爺合戰
曾我會稽山

幻住庵記
風俗文選
鳥らが春

羅山文集
藤樹先生文集
白石詩草

近

世

自二六三
至二五七

(代時戸江)

假名草紙
浮世草紙
日本永代藏
世間胸算用
武道傳來記
草雙紙
黃表紙
酒落本
讀月物語
雨月物語
椿説弓張月
里見八犬傳
合卷本
滑稽本
滑稽本
東海道中膝栗毛
浮世風呂

嵯峨日記
花屋日記
七番日記
奥の細道
旅のなぐさ
菅笠日記

賀茂眞淵集
桂園一枝
狂歌
古今夷曲集
萬歳狂歌集
良寛和尚歌集

御傘
宗因千句
芭蕉七部集
蕪村七部集
一茶發句集

流歌
長吟
歌行
松の落葉
御詠歌
清盤元津

浄瑠璃
國性爺合戰
曾我會稽山
左衛門
菅原傳鑑
手習本
假名千本
忠臣藏
本朝二十四孝
(近松半二)
脚本

幻住庵記
風俗文選
鳥らが春
折焚く柴の記
駿臺雜話
雲萍雜志
閑田耕筆
玉勝間
花月草紙
泊酒筆話
梧窓漫筆
松廼舍落葉
年々隨筆
藤篋冊子
琴後集
うけらが花

羅山文集
藤樹先生文集
白石詩草
鳩巢文集
栗山文集
山陽詩集
山陽文集
言志四錄
正氣歌常陸帶
新巖
星巖
拙堂文集

近

(明治・大正)

傳記的政治小説
經國美談
佳人奇遇
雪中梅
創作
浮雲
五重塔
うたかたの記
瀧口入道
たけくらべ
金色夜叉
不如歸
高野聖
舞姫
破戒
運命
春命
我輩は
猫である
草枕
ふらんす物語
鶉籠
虞美人草
平凡
新土生

蓬生日記
二葉

短歌
亂れ髪
竹の里歌
萩の家歌集
アラ、ギ
(雜誌)
啄木歌集
長塚節歌集
春泥集
空穂歌集
自選歌集叢書

日本派俳句
春夏秋冬
(子規等)
日本俳句抄
子規句集
明治新題句集
海紅
新傾向句
の研究
春夏秋冬
(盧子)
井泉水句集
筑波會・秋聲
會其他
新俳句帖
紅葉句帳

新體詩
孝女白菊の歌
水沫集
若菜集
天地玄黃
一葉舟
夏草
落梅集
天地有情
無弦弓
泣菫詩集
春鳥集
海潮音
白羊宮
日本民謡全集
邪宗門
廢園
啄木遺稿
獨步詩集
舞ごころも
日本象徴詩集
白秋小唄集
春月小曲集
白秋詩集
川路柳虹詩集

戯曲
黃門記
童幼講釋
夜討會我
狩場曙
勸善懲惡
視機關
桐一葉
杏手鳥
孤城落月
牧の方
俠客春雨傘
日蓮上人
辻説法
新曲浦島
義民甚兵衛
井伊大老の死
修善寺物語

隨筆
そらごと
花紅葉
雪月花
黃菊白菊
自然と人生
武蔵野
病間録
仰臥漫錄
墨什一滴
潮待草
萩之家遺稿
筆のしづく
み、ずの
たはごと
筆のまに
竹柏集
斷腸亭雜稟
偶像再興
光あれ
三太郎日記
人生と趣味
嵐の前
小鳥の來る日
洗心雜話
山水巡禮

漢詩文
蒼海全集
藤公詩存
春濤集
槐南集
評
小説神髓
ニイチエ
美的生活論
囚はれたる
文藝
非自然主義
近代文學十講
文藝思潮論
劇場最近十年
心頭雜草
宗教文學論
文藝百科叢書
近代文藝
十一講
日本現代文學
十二講

近

代

自
二五二八

(代 時 正 大 ・ 治 明)

創 雪 中 梅 浮 雲 五 重 塔 うたかたの記 瀧口入道 たけくらべ 金色夜叉 不如歸 高野聖 舞 破 戒 運 命 春 我輩は 猫である 草 枕 鶉籠 虞美人草 平 凡 土 生 新 瀨 舟 宣 言 暗 夜 行 路 大 衆 文 學

萩の家歌集 アラ、ギ (雜誌) 啄木歌集 長塚節歌集 春泥集 空穂歌集 自選歌集叢書

日本俳句抄 子規句集 明治新題句集 海 紅 新傾向句 研究 春夏秋冬 (虛子) 井泉水句集 筑波會・秋聲 會其他 新俳句帖 紅葉句帳

若菜集 天地玄黃 一葉舟 夏 草 落梅集 天地有情 無弦弓 泣菫詩集 春鳥集 海潮音 白羊宮 日本民謡全集 邪宗門 廢園 啄木遺稿 獨歩詩集 舞ごころも 日本象徴詩集 白秋小唄集 春月小曲集 白秋詩集 川路柳虹詩集 明治大正詩選 童 謠 日本童謠集

夜討會我 狩場曙 勸善懲惡 視機關 桐一葉 杏手鳥 孤城落月 牧の方 俠客春雨傘 日蓮上人 辻説法 新曲浦島 義民甚兵衛 井伊大老の死 修善寺物語

雪月花 黃菊白菊 自然と人生 武藏野 病間録 仰臥漫録 墨什一滴 潮待草 萩之家遺稿 筆のしづく み、ずの たはごと 筆のまに、 竹柏集 斷腸亭雜稟 偶像再興 光あれ 三太郎日記 人生と趣味 嵐の前 小鳥の來る日 洗心雜話 山水巡禮 飯倉だより 冬彦集 藪柑子集 三都物語 生命の微光 靜思餘録 山中雜記 七寶の柱 春を待ちつゝ 樹木とその葉 季節の窓 野を歩む者 旅と歌と 若き自然 靜と動との間 洗心録 生田春月全集 感想小品 芥川龍之介集 草木蟲魚 茶話抄 水 荳 樹下石上 續冬彦集

春濤集 槐南集 小説神髓 小イチエ 美的生活論 囚はれたる 文 藝 非自然主義 近代文學十講 文藝思潮論 劇場最近十年 心頭雜草 宗教文學論 文藝百科要義 近代文藝 十二講 日本現代文學 十二講

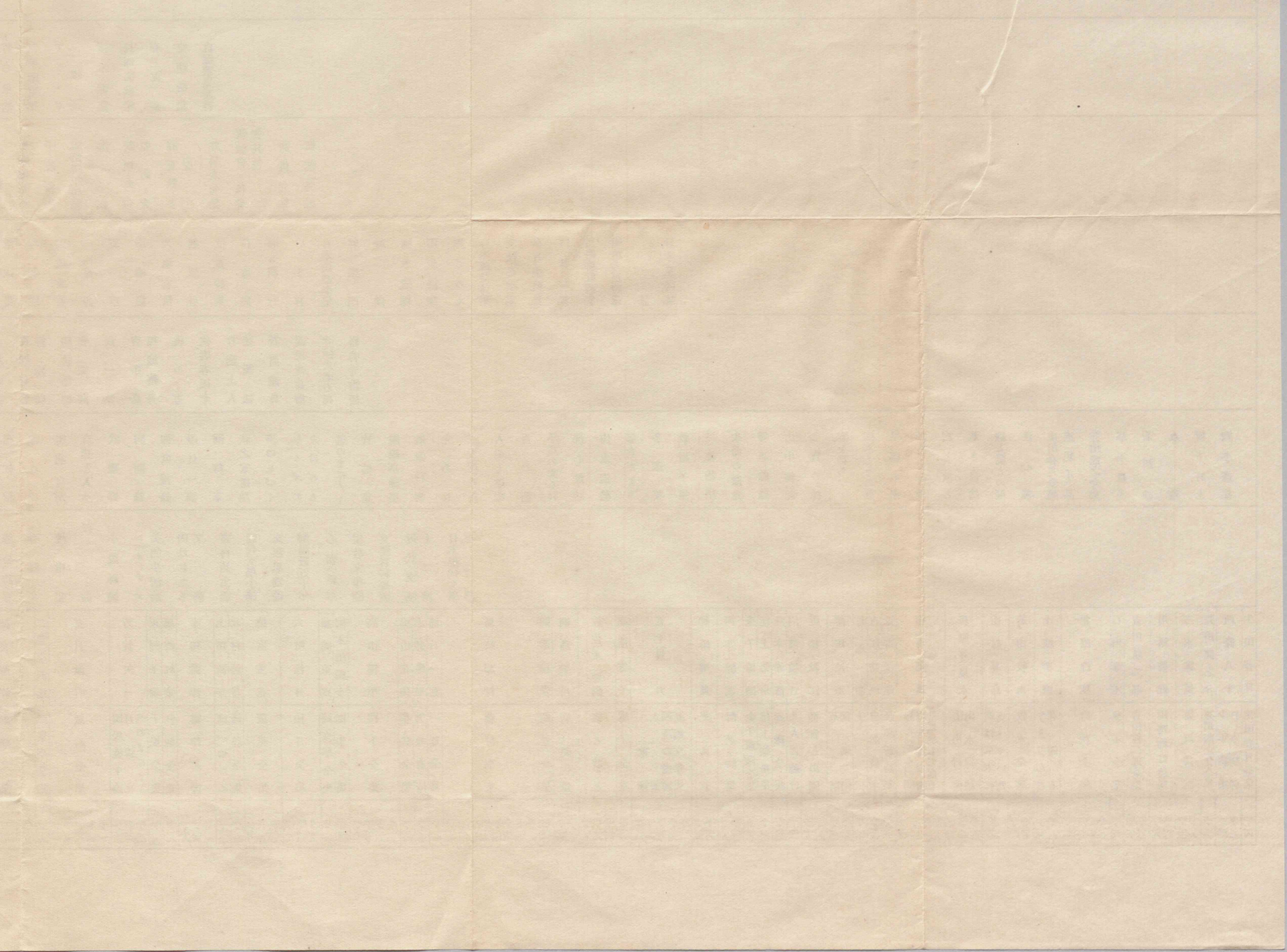


圖 412 後

物

嘉府表額原圖如

外

內

本國之親

三

十

at